特 4

095569-000-3

特22-464

文覚上人（連夜説教）

夢笑道人／著

M28

DBQ-3269

特22
464

文覺上人の序

滄浪の水清まば以て吾纓を洗ふべしとすまし。こむは固より我大乘佛徒の本分にあらざるなり飽迄も世と共に推移して自信敎人信の實を全ふせずんばあるべからず然るに世は日に文明に成行といふと雖も一般人民の思想は却て卑淺に傾くものに似たるは佛說又余を欺かざる乎余か友其中堂主人機を見ること最も敏捷なり常に時好に適するの書籍を刊行して大に世の喝采を博す先頃來傳記稗史等に據りて編著せる連夜說敎なるものを出版したるに是亦最も時好に適し發賣日に數百部に及ふと云ふ茲に於て乎余が僑居を叩き余に一篇をものせんことを乞ふ余や多忙敢て其閑なし然れとも世の嗜好に投じて幾分か佛陀の道敎を弘宣す

ることを得ば復以て自信敎人信の一端なるべきを信じ速に之を諸して此文覺上人を草したり世間或は余か佛戒に背きて綺語せり抔と責むるあらんも余は一身を潔うして以て滿足するものにあらず大法弘宣のためには時に或は地獄の呵責をも辭せさらんと欲するものなり唯其能く微志の萬一を充すを得へきや否やは本書刊行の後にあらざれば知るべからざるのみ聊か卷首に附言することゝ爾り

明治二十八年九月中院於名古屋夜寒里僑居

夢笑道人誌

凡例

一本書逆夜說敎「文覺上人」ハ在來ノ法談本ヲ增補添刪セシノミナラズ說敎書等ヲ多ク參考トシテ著述セシモノナレ𪜈其素ヨリ歷史ニ據テ事實ヲ精確ニ敷衍スルヿヲ旨趣トセシモノニアラサレハ時代及言語ノ曖昧等間々之ナキニシモアラサル可シ讀者之ヲ寬放シテ可ナリ

一本書發行ノ要ハ九夏ノ炎天ニ方リ南窓睡魔ヲ驅除シ或ハ秋夜ノ無聊ニ際シ短檠ヲ剔テ其徒然ヲ慰ムルノ資料ニ供シテ其中ニ佛緣ヲ結成セシメンヿヲ欲スルニアリ左レバ本書中前席ノ說敎ニ於テハ各宗ノ安心ヲ精確ニ說キ後席ノ說敎ニ於テハ汎博融合ヲ旨義トシテ說ケリ是レ猶ホ甘露醍醐ノ食膳ニ添フルニ五味八珍ヲ以テシテ食者ノ頰邊ヲタカシメントスルガ如キナリ

一本書「逆夜說敎」ハ卷末ニ其表題ヲ揭ケシ如ク陸續發行シテ坊間ニ流布セシメン若シ夫レ記事ノ体裁文字ノ使用ニ付テ前冊ト後冊トニ多少ノ異動アルガ如キハ其擬任講師及筆記者ヲ異ニスルガ故ナルノミ豈ニ其他アランヤ

一本書今假ニ說敎十席ヲ以テ一冊ト爲シ發行セシモ以後次冊ヲ發行スルニ方リ講師ノ便宜ニ依リ或ハ五席、或ハ廿席ニ縮伸スルヤ否ヤヲ期ス仍テ玆ニ之ヲ豫言ス

一本書ヲ披キ讀ム者ハ潛心單思シテ其要旨ノアル所ヲ採擇ス可シ然ラバ則チ其身ニ資益スル所アルヤ必セリ然レ𪜈其書ヲ讀ミテ書ニ轉ゼラルヽナカランヲ要ス古語ニ之アリ曰ク法華ヲ讀ム者法華ニ轉ゼラルト豈ニ思ハザルベケンヤ

著者識

連夜說敎

文覺上人目次

○第一席　文覺上人の素性……一頁

付あいさつ○眞相○長谷寺○里子○盛光の病氣

○第二席　文覺上人の生長、元服、橋供養……十一頁

付盛光死去○幼年の行狀○源渡○袈裟御前○婦人の德○衣に袈裟

○第三席　文覺上人の難題、袈裟御前の決心……廿二頁

付盛遠の奸計○衣川○筆談○心の中の暇乞○証據の一筆

○第四席　文覺上人の逆罪、發心、袈裟御前の遺書……三十三頁

付無常の感○渡の驚愕○渡の所置當を得たり○兩勇士の發心○九想詩

○第五席　文覺上人の難行、師弟の問答……四十四頁

付鳥羽の戀塚○盛阿彌の改名○那智山○冥助○高雄山○相照

○第六席　文覺上人狼籍入牢、大赦、資行の遁世……五十五頁

連夜説教 文覺上人目次

付神護寺縁起○八幡の託宣○勅進帳○管絃○亂暴○資行遁世

○第七席　文覺上人流罪、難船、頼朝公の親交……六十六頁

付諷諫○伊豆流罪○斷食○龍神を呵す○人相見○大將の相○院宣

○第八席　文覺上人大願成就、戀塚寺の建立、對客問答……七十七頁

付平家の衰運○石橋山○義仲○順逆の二緣○後世の鑑○筑間祭

○第九席　文覺上人六代御前助命の爲鎌倉に下向す……八十八頁

付平家の余黨○北條時政○命乞ひ○即命し難き二ッの理由○出家の慣例

○第十席　助命の御許狀、文覺上人再流罪……百○頁

付鎌倉殿の嚴命○齋藤五齋藤六○助命○親子の對面○出家○大圓團

連夜説教

文覺上人

夢笑道人著

○第一席（文覺上人の素性）

『雲晴そのちの光とたもふなよ、もとより空に有明の月』文（佛國々師の歌）

拙者は當名古屋市の南邊、夜寒の里に隈居する所謂半僧半俗の身なるが、先頃より俳書林其中堂主人の發意にて連夜説教を始められしところ殊の外好評否滋參なれば、其中堂主人は申すに及ばず、説教師も大得意となりて陸續開席せられ、世俗の能く知れる傳記類は大方出版否説教に及ばれた樣子、夫に就ては拙者にも是非一度は出席せよと度々の依頼默止しがたく、ツィうかと乘氣がさて茲に文覺上人の事蹟を御話し致すことになつたぢや、併し拙者は素より筆不精否口不調法なれば、どうせ他の説教師の樣に面白く談すことは出來ない、故人の句にもある通り「口開ひてはらわた見する柘榴かな」にて、

連夜説教の大當り

定めて黒闇の耻を明白に出すことならんか、ろこが袖振合ふも他生の緣、何事も因緣づくとあさらめて開席より滿座までは參聽せられたきことぢや。

さて讃題に供へたる和歌の意は、雲晴てのちに月の光を見るが故に雲晴てのち光の生ずると思ふは間違ひにて、もとより空に有明の月の光が唯一時雲の爲めに蔽はれて其光を隱したまでぢやといふ有難き悟道の御歌、即ち諸法實相の理を御說敎しなされたものぢや、能う考へて見られよ、兎角吾等凡夫は事物の色相に迷執を起して眞如の實体を認識ることが出來ず、ツイ種々と煩惱惡業を働きて自ら其身其心を苦むることである、今文覺上人の事蹟を御話しするに就ても矢張ろの通りで、說敎師一己の妄想を以て事蹟の眞相を誤ることあるは勿論、甚だしきは此文覺上人を庇護のため跡方もなき事蹟を揑造へ、遂には他人に非惡の冤を裝せる抔は深く愼まねばならぬ、現に或る書籍を讀みしに、彼の正直一途なる渡邊渡を以て此上もなき惡奸となし、袈裟の

●渡邊渡と衣川の迷惑

母衣川を淫逸不貞の繼母とするが如きは、如何にも渡や衣川に對して氣の毒千萬に思ふ、併しろれも斯うせなくては盛遠即ち文覺上人やまたは袈裟御前の價値が顯れぬなら兎に角、斯くしては却て其價値を落すばかりぢや、袈裟の事は暫らく措き、盛遠が最初から一点の批難すべきことなき善人なら何んで姨母衣川を恐嚇し袈裟を殺すが如き罪惡を働かふぞ、普通の人が盛遠は可哀さうなものぢや、とう〳〵堪忍袋の緒を切らして斯々の事をしたかと想像し得らる、盛遠では人は殺せぬ、ヨシ人を殺したにしたところが夫が爲めに發心して絶世無二の文覺上人となることは迚も出來ぬ、己れの煩惱が制しきれずに罪もなき眞實の姨母を恐嚇し、人を殺してゝ色欲を遂げようといふ程の大惡を働く剛の者なればこそ、一旦發心した上は後世まで其名を讃かす大法師とはなりたるものなれ、●、が俚諺に云ふ「惡につよきは善にもつよし」にて、煩惱即菩提、見眞大師の和讃に「罪障功德の躰となる、こはりとみづ

●文覺上人の眞相

のごとくにて、こほりたほさにみづおほし、さはりたほさに徳れほし」とあるも此道理と申すべく、文覺上人も盛遠といふた俗人の内は一筋縄では喰へぬ御方でありしといふ事を記憶して貰ひたい、即ち事物の色相に迷執を起して種々の妄想を逞しうし、終に眞如の實体を認め得ずして事蹟の眞相を誤る如きは深く慎まねばならぬ、全体古人の事蹟を話すに濫りに私の意見を挾さむは甚だよくない、飽迄も虛心平氣となりて事蹟の眞相を認め、夫より自分の身を其當時に置き、自分が其人になりて初めて其所行の善惡を判斷せぬばならぬ、これは話す者ばかりではない、聽く人も亦其心得がなくてはならぬ

●傳記の著者および講談者の心得

例へば此連夜説教を聽くに就ても、文覺上人は斯うだ、袈裟御前はどうだと唯其人々々の事蹟とのみ思ふて、憎らしいとか、可哀さうとか、面白いとか可笑ひとか、他人事として聽ては何の所詮もない、自分の身が其人々々に成替りて考へて見ねばならぬ、如來五十年の御説法も其所對の機は樣々なりし

●傳記の讀者および聽聞者の心得

に相違なけれど、皆是れ自分一人御化導の御妙音と拜聽してこそ往生成佛の得益はあるなれ、たゞうわのそらで居ては幾度聽ても益に立ぬ、拙者も其心算で話すから、どうか諸君も其積りで聽て貰ひたい、ヤア大分前口上が永くなつた、ドレ文覺上人の御話しに取掛りませふ。

●文覺上人の行蹟

我朝佛教の傳通を尋ぬるときは遠く　欽明天皇の御宇にして年を經ること已に久しく、其間に於て名僧知識の出現したまひしこと亦少なしとはせざるなり、されども身武家に成長し、一旦事の緣に觸れて剃髮染衣のそうの上は、啻に難行苦行を厭ず如説に修行せるのみならず、或時は大願を起して偉業を仕遂げ、或時は瞋恚の鋒先に數多の人命を害し、或時は慈愍を垂れて孤獨を庇護し、數々危難に陷れども敢て少しも意に介せず、其行蹟の一として人の意表に出でざるなく人々奇異の思ひをなせる、今古ろの例なき法師は實に是れ文覺上人なるべし、抑も此文覺上人の素性如何と尋ぬるに、今を距ること七

●文覺上人の素性

百有餘年の往昔、禁裏北面の武士に渡邊黨なるものあり、何れも強きを挫き弱きを扶け、義俠に勇むを以て世に持囃さるゝが中にも遠藤左近將監盛光といへるは、固より文武の心掛け淺からず、其譽れいと高かりける、然るに此盛光物旬不自由なき身の上なれども唯一つの不足といふは、年齢已に六十路に及べど跡とつぐべき一子なく、夫妻とも朝暮に之をのみ歎き悲み、遂に長谷寺に參籠して只管一子を授け玉へと祈請を凝すにたち至りぬ、斯くて一七日の參籠も魔事なく滿ずる曉の夢に、大悲の御手より鳶の羽を一枚賜はるを左の袖の上にて受けたてまつるを見て、ろれより有身の覺えありとかや。

●靈夢に感じて子を孕む

全体今の世人は神佛の祈受子だの奇跡だのといふことは信仰しない、排者り矢張り信仰しない方である、ろれに何故此事を省かずに御話しするかといふに、此祈受子の事は文覺上人ばかりではない、古來世の中に名を顯した英雄豪傑の多くは大抵神佛の祈受子としてあるようだ、勿論往古の人は亦誠を以て神佛に祈請をかけると何事でも成就するものと思ひ込んだので、ろれで子のなき者は何れも神佛に子を授け玉へと祈りたことは事實に相違ない、されば靈驗の有無は兎も角も、盛光夫妻が長谷寺に祈請をかけて參籠したことは事實に相違あるまい、ろして今迄子のなかりし四十餘の妻が俄かに妊身したことも、果して靈驗ありしといふも萬更無稽の說とは申されぬ、殊に此等の事は別段他人に影響のないことであるから傳說の儘を御話し致したことである、併し成るべく奇蹟などは省く積りであるから其心して撰聞して賞ひたいことぢや。

●神佛の祈受子

●文覺上人の誕生

さて程もなく月滿て產出したる其子といふは玉を欺く男子にて、之なむ即ち後の世迄も其名を謝かしたりける聖僧文覺上人なり、かくて父盛光の欣喜譬へん方もなき程なりしかど茲にまた悲歎に堪ざる事起りけるころ是非なけれ玉を欺く男子をば產出しぬる母の年齢最早四十の上を超す三つばかりにて初

●悲喜交々來る

産の事なりければ兎や角と、臨産のみを苦にやみて朝暮案じ煩ひし心氣も疲れ果てぬるためにや、産後の惱み殊更重く、今や折角産出せる可愛き我子の顏さへも碌に見分かず冥土へと旅立ちせしころ悼しけれ、實にや古人の格言に云ふ、「禍福はあざなへる繩の如し」、右の手に持ちたる藁のいつしか左の手に移り繩を作るに均しくして、福忽ち變じては禍となりぬることこれや浮世の有樣なり、又も「慶者は堂に在り吊者は門に臨む」といふ、慶賀の客未だ去らぬにハヤ吊憂の人來るは正しく盛光か身の上にて、可愛き我兒の顏を見て欣喜抑へがたけれども、年比連れ添ふ亡妻の死骸を見ては悲歎に堪ゑず、悲喜こも〳〵に胸迫り、男泣なきにぞ哭いたりける、さて斯くてのみあるべきならねば、先づ人を雇ひ亡妻の死骸をば取片付け、葬儀とてもろこ〳〵に相營みて爰にまた、可愛き子をば男の手只一つにて詮術なく、急ぎ乳母を探し求めてこれに哺乳せしめしかども、眞情とては露程もあらぬ乳母の所爲を

●文覺上人春木入道に預けらる

見ては哀れいや增すはかりにて日夜心を痛め居たるが、フト以前主從の如く交り居たる丹波國保津庄下司春木二郎入道々善が事思ひ付きぬ、此道善が妻といふも性質柔和にして能く小兒をば愛育する事さへ疾くに知り居たれば、寧ろ道善が方へ預けんものと、早速に飛脚を立て、急ぎ道善を呼が迎へ、事の顚末委しく語り、何卒この可愛き子を養育し玉ひてよと、涙と共に他事もなき賴みに道善默止がたく心克く之を肯ひ、此頑是なき稚兒は遠くも慈父の許を離れ、丹波國保津庄にと引移され、道善が慈情によりて生長ける事とはなりにき。ナント諸君、此時の盛光の心情は如何であつたらうか、實に想ひやるさへ涙のこぼれる哀れな話しぢや、拙者も昨年稚兒を殘して荊妻に先立たれ、兼々無常の道理は心得て居てさへ、其當時といふものは稚兒を見るにつけ、荊妻を想ふにつけ、涙の乾く間はなかつた、諸君の中にも定めて身に經驗のある御方もあらふ、さて〳〵儘ならぬ浮世ぢや、之に就ても親の恩を

●父母の恩

疎畧にしてはならぬ、誰れ一人此世の中に親のないものがあらふか、何れも父母の海山も及ばざる慈悲によりて成長したのである、父母恩重經の中には親の恩の深重なることが十種擧げて說てある、どうか此等を思ひ合されて飽迄も親の恩を報じて貰ひたい、此親の恩を報ずるに就ても種々あることで、先づ此世に於て親に孝行を盡すのは世間の報じようぢや、また自分が有緣の宗旨によりて往生成佛して文覺上人などの樣に、此世の父母ばかりでなく生生世々の父母たりし一切衆生を濟度するのは出世間の報じようぢや、どうか諸君は此世出世の二箇とも報じて貰ひたいことである、ヤアまたしても横道に這入りかけた、ドレ文覺上人の御話しに立戻らふ、併し大分時間も更けたし、兎角開席は面白くないので諸君も退屈なされた樣子ぢや、拙者も疲勞を感じて來たから今晩はこれで閉會と致し、明晩よりは今少し早く始めて、段段面白き處を永く御話し申すから、其積りではや〳〵御參詣が願ひたいもの

ぢや、まづ……下座

第二席

（文覺上人の生長、元服、橋供養）

（兼輔朝臣の歌）

人の親の心は暗にあらねども、子を思ふ故に迷ひぬる哉

●文覺上人父盛光の病氣

實に月日に關守なくして春と暮れ秋と經ていつしか三歲ばかりの年月を過行きしが、流石に物の道理にも暗からざりし遠藤左近將監盛光も、只今贅題に供へたる和歌の如く、我子の愛に引されては深く迷ひの闇に立入り、朝暮案じ煩ひぬること老の身の障りとなり、これも又もやいと重き病の床に打臥したり、一日盛光思ふやう、所詮此度の病氣は全快すること覺束なし、責ては此世の見終に我子の顏をば見んものと、此由入道道善が方へ申し送りければ道善强く打驚き、早々幼兒を介抱して盛光許に到着したりぬ、斯くて盛光は重き枕を擡げつ、我を忘れて可愛き我子を打守るに、骨逞しく肉肥太りて見紛ふまでに成長し、道善が心肇しのほども自然と見え分くにぞ、盛光歡喜の

涙止めも敢ず、我今死亡なば此子は全く孤獨となり、其生長如何ありなんかと夫れのみ冥路の迷ひなりしが、斯く貴殿の深き慈育によりて生長することの嬉しさよ、我亡き跡は殊更に我に替りて、眞實の貴殿の子とばし思召され呉々も養育成人せしめて、あはれ遠藤の家名を續せてたべ、之れのみぞ我身今生の願ひなれと、子を思ふ親の眞情餘儀なき頼みに道善も、暫時は貰ひ泣きしたりけるが、漸々涙を拂ひ氣を靜め、こは改まりぬる仰せかな、假令御頼みなければとて何條疎畧に致すべきや、道善が生命に代へても、此若君は必ずとも護育て參らすべければ、もめ〳〵御心を掛けさせ玉ふべからずと、

●盛光の死去

頼み甲斐ある道善が返答に、盛光愈々安堵の氣緩みして、其夕俄かに摸樣革り終に果敢なく失にける、さて道善は憂愁の中にも法式の如く葬儀なし、再び幼兒を介抱して丹波にと連れ歸り、ろれよりは猶更に心を用養ひ育しけるが、此幼兒成長するに隨ひて筋骨益々逞しく成行き、精神飽迄剛毅にして力量飽迄強く、已れに順伏する者は愛して之を友とすれども、一旦其旨に違ふことあれば忽ち忿怒して之を打擲し、其性質總て上長を凌ぐの風あり、己れ一度言出しぬる時は假令邪も非も貫徹すといふ、兎角荒々しき振舞のみ多かりければ、道善數々之を諭し誡むれども唯馬耳東風とのみ聞流して更に順ふべき氣色なく、日夜山野を駈け廻り田畑をあらすのみならず、童牧が牽きて通ひける牛馬に石打などなして、惡業益々增長しければ、道善が家内の者は申すに及ばず、隣家近鄕にまで持餘され、果は道善も之を苦に惱み、終に亡き人の數にとは入りぬることころ是非なけれ。ナント諸君、文覺上人の幼少な時は實に驚くべき徒物であつたでは御座らぬか、古書にも『栴檀は二葉より馨し』とありて、後の世に名を殘すほどの人は何れも幼少な時からして普通の子供とは違ふ所があるものぢや、ケレども此文覺上人の樣な倭厄者はないようだ、併しろこが文覺上人の文覺上人たる所にして、此剛毅不撓の性質が物

●文覺上人幼時の行蹟

●道善の死去

の縁に觸れて、喜怒哀樂の情念を動す時は必ず仕遂げたものと見ゐる、總て人間萬事中三ぶらりでは成就しない、勇猛精進疑網を打破りて「精神一到何事不レ成」といふ大決斷心を起さねばならぬ、オット閑話休止。さて道善死亡ぬる時には盛光が遺子もハヤ十三歳の春を迎へしことなれば、何時までか此保津庄に寄食すべき樣もなく、幸ひ一門に遠藤三郎瀧口遠光となん云へる者あり、引取りて世話し呉れんとのことに早々京都に上せしところ、其筋骨逞しくして剛愎なること却て遠光の意に適ひ之れを愛育すること我子の如く茲に自ら烏帽子親となりて元服させ、父盛光が一字と己れ遠光の一字とを取りて盛遠とぞ名乘せける、斯くて武藝をも習ひ得さするに一を聞て十を知るの才覺あり、況して身の丈も大人に均しく、力量飽迄強くして、適れ耻かしからぬ武士と成課せしかば、彼の亡父盛光が跡を追ふて上西門院の北面に參らす事となり、依て遠藤武者盛遠とは申せしなり、其後間なもく居住を烏羽

●文覺上人の元服

の里にと定め、渡邊左衛門尉源渡と同じく城南の離宮守護を仰付けられ、勤番更に懈怠なくいと忠實しくぞ見ゐたりける、然るに茲に一つの不思議ともいふべきは、盛遠ごとき武骨一遍の武士に似もやらず、平生母の難產にて死亡ぬること、父も亦其憂愁の消えやらで歸らぬ人の數に入りにし事抔思ひ忘られでや、追福の志し淺からずして、誰れ敎へねど千手經を讀誦し、之を毎日の日課として怠ることはなかりしとかや。俚諺に先入主となるとありて先に這入りしものが主となり、先に聞いた噺が本當のように思れるとは如何にも尤もなことで、拙者等が幼少の時に覺え込んだ四書五經は今でもろらに詞めるけれども、さて成長して覺えた御經は少し復習ずに月日が經つと忘れて困る、我國德川樣の時には餘り太平が打續きて、佛敎は年老いてから始めて聽聞するものといふような惡弊が增長し、段々年若き者が佛緣に遠ざかり、遂に佛敎は老人の專賣特許といふ有樣に立至りしは如何にも慨はしきこ

●文覺上人の勤仕

●佛教の弊習

とである、近年此弊を矯正さんとの思ひ付きで、處々佛教上から少年會を組織られたものあるは　至極結構なこと、隨喜するところである、其道理は分りても分らないでも、年若き少年輩に御經などを敎へて讀ませるのは自然佛緣を結ぶのである、今文覺上人が少年の比よりして御經を讀誦せられたのはこれが正しく剃髮染衣して大法師となられる緣の端緒とも申すべきものである、くれ〳〵も少年の時からして佛緣を結ばするのが至極肝要なことで御座るテ茲に盛遠の年齡已に十七歲となりにし春、即ち天養元年三月中旬に渡邊の橋供養といふ事あり、これが奉行を勤むるは元より名譽ある役儀なるに平常勤番の忠實なるを愛でさせられてにや、年尙は若き盛遠に其日の奉行を任命あり、盛遠此上もなき面目なれば喜ぶこと一方ならず、急ぎ夫々準備を整へたる其日の裝束といふは、村紺の直垂に黑糸威の腹卷、折烏帽子を打着て、銀の蛭卷二筋通して卷たる長刀抱ひこみ、辻々警固の兵士共を下知し廻

●文覺上人橋供養の奉行となる

●文覺上人袈裟御前を假想す

りて、橋の上にと立わたりたる容貌は、ひと嚴正しくもまた優長にぞ見えたりける、斯くて供養の事漸く結了を告げ、拜觀の群衆男女貴賤各々家路に歸りけるが、ろの容貌の種々樣々なるが中にも、年若き婦女などは我も〳〵と錦繡羅綾を着飾り、風流を盡し紅粉を裝ひ細腰綾〳〵運びて空燒の薰り床しく實にや男子の魂魄を奪ひぬべき傾國の美人なきにあらねども、固より武骨一遍の盛遠なれば目にだも掛けず、只管其日の役儀を大切に勤め居たりぬ。然るに前生如何なる宿業にやありけむ、北の橋詰より東へ三間程隔りぬる棧敷の內より年齡十六七ばかりの女房、今迎ひにと持來りし輿に乘移らんものと簾を擧げさせつる時、盛遠何心なく之を打見やれば、雲の鬢髮、花の顏色、半輪雙點の眉、春風楊柳の姿、これぞ世にいふ支那の楊貴妃にも曁るめれと盛遠俄かに煩惱の色情動き初め、迎も此世の中に女房を帶ぬるならば斯る女ころ望ましけれと、深くも執着の念を起し、頻りに戀しく思ひ詰め、抑も此

●文覺上人の戀病

女は誰人の娘にして誰人の妻なるぞと、今は大切の役儀さへ打忘れて、餘所ながら彼の女の歸路を暴ひ行きしに、思ひきや鳥羽の里渡邊左衞門尉渡が宅にぞ入りたりける、さらは同役渡が妻なるか、去るにても渡が妻は我姨母の娘なりと灰に聞きつるものをと、猶爲と尋ね試みるに、是なん正しく衣川殿の御娘渡殿の御内なりと具に告ぐる者あり、盛遠熟々思ふやう、此二三年見ざりし間に、袈裟御前が丈長けて面變りせしことの甚だしさよ、何時の間に斯くまで美婦はなりけるものか、我も先年姨母に申し入れつるものを、姨母我を餘所にして一言の斷りだになく、渡を婿に定めぬることの口惜さよ、此憤怒いかゝしてか散じ得べき、若し此儘にして思ひ沈みなば終に空しく相果てなむ、所詮此旨姨母にまで云ひ入れ見んか、我がためには姨母なれども慈には姨母も仇敵なり、仇敵と見ては姨母なりとて用捨はならじ、叶はぬ時は唯一刀に打果して我も其場に腹切らんのみと、理もなき事に道理を附けてさま〳〵に思ひ惱み、遂には物事手に就かず怪しき疾病の床にと臥したり。ナント諸君、武骨一遍剛强無比の盛遠も一旦色欲の迷情を動かしては斯迄愚かに成行くもので御座る、愼みても愼むべきは色欲の迷情……彼の新田義貞公ほどの忠臣でも勾當内侍のためには出陣の時機を誤り、山を拔くの英雄項羽でさへ最後の戰場に虞や〳〵汝を奈何せうかと妻君との離別を惜み、其他古來英雄豪傑が色欲のために其身を過ち、汚名を後の世まで流したことは一々申し盡されない程である、ろれだから佛は「外面似菩薩内心如夜叉」と御誡めなされ、また悟道の上から無常變遷を御說きなされては、いくら小野小町ほどの美人でも年老いては皺くた婆となる、唯人を迷はすの容色は夢の間で憑みにならぬと仰せられたので、實にもと思ひ付いたかどうだか、和泉式部は「面影のかはらで年のつもれかし、たとへ命は限りあるとも」と愚痴をこぼした、まだろれどころではない、活眼を開いて眞相を看破るときは

●道歌三首

美人不美人の區別がないぞころか男女の區別さへ分らぬので、アレハよひ婦人ぢやなど、いふて戀慕するのは何れも色相に執着した凡夫の迷惑である、依て一遍上人は『皮にころ男女の色はあれ、骨にはかはる人形もなし』と御詠みなされた、何んにしても色欲の迷鬼となることは深く誡めねばならぬ、併し斯う申したからとて強ちに御婦人を惡くいふのではない、一休和尚は『女をば法の御藏といふぞかし、釋迦も達磨もひよい〳〵と産む』と仰せられたことで、如何にも釋迦牟尼如來や達磨大師は申すに及ばず、どんな英雄豪傑でも女の腹から産れて出ぬものは一人もない、中々婦人とて卑下することは出來ぬ、殊に文覺上人が袈裟御前を懇相することがなかつたなら、人天の大導師となられる因緣は熟せなんだかも知れぬ、これが逆緣といふもので大悲の權化やらも分らぬ、依て袈裟御前の素性も一通りは心得ておきたいことぢや。盛遠が姨母衣川といへるは父盛光の異母妹にて、年なは若かりき時或

●色欲の迷鬼

●袈裟御前の素性

る武士の妻となりて奥州衣川にと移り住み、夫婦の中に一人の娘を設け、樂しき月日を送りぬることも僅々の夢の間にて、夫たりし人疾病のために歸らぬ旅立したりければ、心面白からぬ憂世と思ひ詫び、頻りに故郷の懷かしく成行き、遂に歸り來て鳥羽雙の里に住居を求めぬ、されば一家の者ども往來して、奥州衣川に在けるに因り衣川殿とぞ稱しける、此衣川元來國色人並に勝れしかば娘も亦容貌美麗しく、名をば吾妻と呼びたれども、衣川の娘なればとて是も亦袈裟御前と異名したりぬ、然るに衣川の年齡猶左のみ長けたるにわらねば再緣を勸むる者ありしかども、娘が愛にのみ引されて肯ふべき樣子もなく、只管袈裟御前の生長を待ち居たるに、いつしか年月經ちてハヤ十四の春を迎へぬれば、一門の渡、盛遠を始め他家よりも良媒を求めて妻に娶らんといふ者多かりき、中にも渡の懇望一方ならざりしに、渡の性質柔和にして面容さへ醜くからねば、深く衣川の意に適ひて外樣の談合にも及ばず、左

●袈裟御前の結婚

衛門尉渡方へと嫁がせたり、斯くて袈裟とても心惡くからず思ひしより偕老同穴の契り淺からず、茲に早くも二年あまりの光陰を送れり、衣川の方にては一人淋しき住居なれども、素より情ある渡が供給に不自由なく、唯袈裟御前をば力とし、初孫の顏見んものと樂しむの外なかりしとかや。

さて段々話が面白くなつて來たので大分長座いたした、今晩はまづ此位にして置て、明晩は愈々盛遠が發心といふ益々佳境に入りて御話しするから、相替らず早々と御出掛けになりたいものぢや」……下座

○第三席　（文覺上人の難題、袈裟御前の決心）

露かさ淺芽が原に迷ふ身の、いと、暗路に入るぞ悲しさ」文（袈裟御前か辭世の給）

さても遠藤武者盛遠は一度袈裟御前を懇想してより以來、風の朝雨の夕須臾だも忘るゝことなく、果は起臥さへ安からずして三月が程は過行しが、今はハヤ思ひ惱みて忍び兼ねけん、一日朝まだきより姨母衣川が許にと到り、矢庭に姨母の立頸取て押へ、物をも云はず太刀拔放して腹に指當て、あはや殺害しなん有樣なり、衣川打愕きてうつゝ心もなかりしが、よう〳〵仰ぎ見れば甥盛遠なるにぞ、泣々申し出けるやうは、抑々和殿は我甥にして我は和殿の姨母ならずや、此中固より怨ある筈なし、就中御邊の母死しての後は我子の如く愛でにしものを、何人が如何に讒言したればとて、斯く憂き振舞をばしたまふぞや、身に誤失ありとしも覺えず、暫時命を助けて怨恨の一通り述べ玉ひね、言ひ解きなん由もありぬべきにと、盛遠心狂ひ目を瞋らし、姨母なりとても我を惱まし、終には殺し玉ふ敵なれば見遁すまじ、渡邊黨の習ひとして敵を目に懸けては宥さぬなり、只今御命をば申し受くべしと、又々刀を腹に當て指貫かんづ勢ひなり、衣川は肝魂も消えなん思ひ、わな〻〻申しけるやう、我寡婦にして夫なければ、和殿に於て意趣ある筈なし、思ひよらぬ事のみ聽くもの哉、何人が如何なる事を申しつるぞと、盛遠瞋りの聲

●文覺上人姨母を恐嚇す

●一時のかれ衣川娘を死地に沼る

銳ぐ、イヤ是れ他人の申すにあらず、袈裟御前を女房にせんと、内々申し入れにしこと、ヨモ忘れはせられまじ、さるに一言の挨拶だになきのみか、平生腹黑き渡が許へ嫁せたれば、此三年が程は人知れず戀路に迷ひ身は空蟬の脱の如く成果て、命は草葉の露と共に消えなんとす、戀には人の死なぬものかは、是れこそ姨母の甥を殺すものなれ、生存へて物思ふも苦しければ敵と一所に死なんとは思ふなりと、さ〳〵、衣川漸〳〵に盛遠が意中を察し得て、何卒此場の危難をば遁れんものと言葉を巧み、成程左な云はるれば兎角の世評聞きしかども、箇程までとは思ひ侍らず、身貧しくして何方とも思ひ分ぬ其間に、渡來りて奪ふが如く娶りしかば是非に及ばず、去迎も左程までに思ひ給は、事いと安し、まづ刀をは納められよ、今にも呼寄せて見せ申さんと、いふにやう〳〵盛遠が心の瞋り和らぎて、若し其言葉に僞りなくば疾く呼寄せたまふべし、暫時が程は命を延べ參らせなむ、去りながら萬一渡が方へ返

●衣川娘袈裟を招く文

忠なぞし給はゞ決して用捨はあるべからず、先づ夫迄は奥の一間、休息して吉相さ待ち申さんと、漸くに刀を鞘に納めつゝ、奥の間さして打ち通りぬ。斯くて衣川は胸撫下し、一先づ虎口は遁れしかど、盛遠が今の有樣、若し等閑にせば一定事に逢ひぬべし、去迎娘を呼寄せんも何とてか言出でなむ、また渡が恨みの程もいかゞせんと、流石女の智慮淺く、千々に心を碎けども、光立つものは涙にて、泣くより外の事もなく、覺束なくもやう〳〵に案じ究めて文を認め、娘袈裟御前か許へと遣したり、袈裟御前は思ひ設けぬ母の文何事やらんと急き披き見れば、

此程風の心地候、打臥すまでの事はなし、披露までは事々しく候、忍びておはしませ、申合すべき事侍るなり、寡なる身には墓なきことのみ、返す返す忍びて只一人ぞはしませ

とこそ書たりける、袈裟御前は此消息を取上げ見て頻りに胸打騷ぎ、少時思

●衣川難題

案の体なりしが、何とやらん心細き御文なり、早々尋ね見参らすべしと、女の童一人を引具し、母衣川の許へと訪ひ来りぬ、衣川つく〳〵と袈裟の顔を打ち守り、はら〳〵と落ち来る涙拭いもあへず、起て手箱の裏より懐劍を取出し、袈裟が前に之を差置きて、いざ此懐劍を以て我身を殺してたべと云ふにぞ、袈裟大に愕ろき忙れ、コハ何事にてかはするぞ、御物にばし狂はせたまふにやと、顔打ちながめ居たりしが、衣川重ねて云へるやう、我身強ちに物に狂ふにはあらず、物に狂ふは勢の盛遠にてろあれ、盛遠今朝早々に尋ね来りて斯々の次第なり、盛遠が思ひ晴れやらずば我終に殺されなむ、されば盛遠が思ひ晴らさんには渡が心を破りなむ、渡が心を破らずば我命なかるべし、假令我命捨てたりとも渡が心は破られまじ、所詮死なで叶はぬ我命、盛遠が手にか、らんよりは和御前が手にかけ殺してたべと、聲を惜まず泣き沈みぬ、袈裟御前始終を聽き取り、さては盛遠が難題なりしか、彼れ強

●袈裟御前の決心

情なるが故に容易くは承引くまじ、如何してか此場を治めんものと、胸先づ打ち騒ぎを須臾途方に暮れ居たるが、眼の前母衣川の愁歎といひ、今はハヤ猶豫ふべきところならねば、心の中に深くも思ひ寃むることわり、コハ是れ安き事にてろあれ、親の命に代りなむ爲めには假令身を汚し侍るも何に厭ひぬべき、ヨシ虚言を申しなんとて口ころ穢るれ、心までは穢れ候ふまじ、世には穢の爲めなりせば伸城白柏子にもなりぬるものをと、いと甲斐〳〵しく云ひまぎらし、急來る涙を袖に包みて何氣なき体に繕ひ、盛遠が休息する奥の一間に赴きけり、さて袈裟前前は豫て覺悟の上なれば、盛遠が言葉のまに〳〵程能く柳と受け流し、なほ餘所ながら渡を恨める樣に持成し、盛遠が心漸く解けて喜び顔色にほの見えし頃、袈裟御前更に紙筆取りて云ひけるやう、茲に一箇の大事てろあれ、密事なれば壁には出すべからず、紙に書付け侍りなんと、即ち書き列ねたる文言は、

●袈裟御前の筆談

誠に浅からず思召し手はらば、渡を夜打にしたまへかし、我何事なき体にてかへり、酒をまうけて渡を請じ、高殿にて髪を洗はせ、酒をも強ひず、めて熟睡せしめん、前栽の妻戸開くべき様に拵へ待つべし、枕邊に烏帽子をも置きぬべし、帳臺の前にして、濡れたる髪と烏帽子とを証據とし、矢庭に討果したまふべし

●渡を殺害の約束

流石女の心亂れて筆の運びも思ふに任せず、涙にゝじむ薄墨の、しどろもどろに書き終り、盛遠が手に渡せば、盛遠讀んで打ちうなづき、喜ぶこと大方ならず、此意趣爲と心得たり、併し頃は幾日、ナニ明後日の夜半とや、手ぬるし手ぬるし、善は急げといふことあり、今日の日影は猶高し、今宵の丑刻に討果さん、必ず手筈に間違ひなくと、元より不敵の盛遠が言葉も今は覺悟の上、袈裟御前も打ちうなづき、實に延引では障害や出でなむ、いかにも今宵の眞夜中頃と、堅く言葉をつがひしかば、盛遠勇み喜びて我家へころは歸り

●胸に涙の雨

ける、斯くて袈裟御前は張詰し氣も俄かに弛み、堪へ〳〵し溜涙止め兼てや暫時は泣き平伏て居たりしが、ハヤ日は西の山の端に入相の鐘無常の聲、今日を限りの壽命にて、これが御顏の見終ぞと、母にもろれと打明けて、云ふに云はれぬ此場の仕儀、やう〳〵心取直し、只餘所ながら衣川に永き離別の暇を告げ、進まぬ足を勵して渡が許へと立歸りぬ、然るに左衛門尉渡は、最愛の妻袈裟御前の母衣川が病氣と聞き、殊の外心を惱し居たりしが、問もなく袈裟御前の立歸りければ、急ぎ樣子如何と問ひ試みしに、袈裟御前は打ち微笑み、彼の消息にては心元なく早々訪ひ見たりしも、些したる病氣とてもなく、た、何んとなふ吾顏の見たかりしかば斯く謀りぬとかや、いかに我母の年老ひたればとて、斯る愚かなる業して驚かしまゐらしつることの畏こさよと、何氣なき体に云ひ紛らし、かば、渡は喜ぶこと大方ならず、實に世公の老の愚に返りたまふことの可笑さよ、併しろれ聞て安堵したりぬ、幸ひ貴

ひ合せつる肴もあれば、いざ祝賀の酒筵せんと、家族等をも打集ひ、酒酌し交し歌ひさゞめき、ハヤ初夜過ぐる頃となり、渡は強く酒に酔ひどれ、神なちぬ身の眼前悲歎ありとも知る由なく、小歌をうたひ寢室に入り、前後も分かず熟睡したりぬ。ナント諸君、盛遠ほどの大惡人は世に澤山其例を見ぬでは御座らぬか、併し盛遠の大惡人であつたといふことは申迄もないことぢやが、夫に付ても心得難いのは袈裟御前、成程親の爲めに身を汚すといふことは、固より櫛道即ち方便として時に或は許すこともあらふし、また實際其例もないではあるまい、ケレども盛遠に向て大ろれた我妻渡を殺せといふが如きは何事ぞ、若し其言葉のように實行したなら實に不貞不義の大惡人と云はねばならぬ、然るに之も亦方便なりしかば、盛遠ほどの大惡人も文覺上人といふ大法師となられる因緣が熟したのである、なにとか此場の結局をつけるには此袈裟御前に非常の決心がなくては叶はぬ、古來婦人にして櫛道に處し

●袈裟御前の櫛道

た人は少なくないが、先づ大磯の虎は曾我十郎祐成が亡靈を吊はんと綠の黑髮を切拂ひて尼と成すまし、常盤御前は我子の生命を助け源家の再興を謀らしめんが爲めに當の敵ともいふべき清盛に身を委し、靜御前は我夫を慕ふて頼朝の忿怒に觸るゝことをも憚からずしづやしづと歌ふて諷した、其他夫と共に即に死し、また尼となりて其貞操を全うしたるものは澤山ある、今此袈裟御前は如何したであらふか、もとより讃美に供へた歌の通り節に死んだに違ひない、然り節に死んだ中にも此袈裟御前の如きは最も萬世の龜鑑となるべきことであらふと思ふ、マア克く考へて御覽なされ、袈裟御前が盛遠に向て我夫渡を討てといふ時、此事を紙に書て渡したのは何か譯のありさうなものぢや、尤も自分でも云ふ通り密事は聲に出されぬからであらふか、イヤ〳〵ろんなことぞころでなく二箇の理由があるようだ、我最愛の夫渡を討ち果せといふは實に此上もなき大惡事である、ろれを口で云ふことは中々六ケしい

●常盤、虎、靜

●雜談二箇の理由

まして心と口とが反對であるときは猶更聲がふるふて程よくは咄せぬ、もしろれを盛遠に覺られては一大事であるから紙に書たものと見へる、これが第一の理由ぢや、またされはとて今儘にすまされはせず、己に斯く實行するとなりては萬一間違へて他の人を殺させてはならぬ、依て聞違ひなどよりして他人の迷惑の掛らぬ樣、しかと紙に書て盛遠に渡したものと見へる、これが第二の理由ぢや、袈裟御前は此位に注意に注意を加へたから盛遠を欺き終せたことは申す迄もなく、母や夫にも更に其素振を悟られなんだことである、併し母に暇を告げた時ヤ、夫に酒を勸めて寐させた時の袈裟御前が胸の中はどうであつたらふ、實に思ひやるさへ哀れな噺しぢや、ろれどころか、我命はいよくと愈々今夜限りと決心しては中々寐入るにも寐入られなんだであらふ、いざとばかり一刀の下に我首を打落さるゝを、ろら寐入りして居た時の心持はどうであつたらふ、これは思ひやることも出來ぬほどのことぢや、これに就ても

●念佛の稱へ方

或人が法然上人に念佛の稱へ心を尋ねたとき上人は「今首切らるゝと云ふ思ひになりて稱へよ」と答へさせられたといふ事を思ひ出したが、いかにも有難い仰せである、我々は今一刀の下に首切らるゝことはあるまいけれど、無常の利刀は時々刻々に我々が壽命を切り縮めて居る、殊に我々の身体は四百四病の寄宿舍、いついかなる病氣にかゝりて死なぬとも限らぬ、して見れば袈裟御前が首切らるゝ時の思ひも決して我々が身の上にはないとも申されぬ何にしても忽緒にならぬのは後生の一大事で御座る、ヤアまたしても咄しが横道に這入りかけた、いよいよ明晩は文覺上人發心の御話しぢや、先づはこれにて」……下座

○第四席　（文覺上人の逆罪、發心。袈裟御前の遺書）

閻路にも共に迷はて蓬生に、獨り露けき身をいかにせん」文（袈裟が母衣川歌）

頃は天養元年六月二十四日の夜半、遠藤武者盛遠は豫て袈裟御前とつがひぬ

●文覺上人の逆罪

るが如く、左衛門尉渡が許へと忍び入り、先づ前栽の妻戸を推し試みるに、袈裟御前が言葉に違はず難なく開きしかば、愈々仕合せよしと打ちうなづきやう〳〵高殿にと登り往き、帳臺の前に探りよれば、果して烏帽子あり、また濡れたる髪にて臥す者あり、さてころ渡意得たれと、抜く手も見せず一刀に寐首を討ちて持去りける。斯くて盛遠は我家に歸り、首をば箱に匿し置き暫時寐床に入りしかども、只何となく心嬉しく、間眠みもせず居たりしが、ハヤほのぼのと夜明の空、不生心惡くかりし渡が死顔見まほしく、獨り笑みつゝ起き上り、首を取出し打見れば、コハろもいかに女の首、南無三仕損せしかと熟々見れば、之れなむ平生心憎くかりき渡が首と思ひの外、朝暮想ひ慕ふたる袈裟御前が首なりけり、盛遠強く打ち愕き、須臾が程は途方にくれさし低首れて居たりしが、忽ちハッと目を瞋らし、憎くき女、よくころ我を欺むきたれと、袈裟御前が首打ち守りしが、またハラ〳〵と涙を流し、さて

●文覺上人の懺悔と無常を感ずる事

も淺間しき此有樣、夫渡に貞操を立てぬき、我及にと掛りけるよな、噫我身ころ不道なりけれ、程兇く渡を討果し、永き妹背の詰らひをと、今の今まで樂しみに、思ひしことは水の泡、實に味氣なき浮世かな、日頃信仰淺からぬ神々にまで祈願をこめ、無道の望みを果さんと願ひし御罰ぞ畏けれと、一途に思ひ迫りては身の惜き處さへなき相に、大聲あげて哭き叫び、頻りに前罪を悔むに就け、自然と諸法の無常を悟じ、生ある者は必ず死し、會ひにし者は定めて離る、上界にさへ退沒あり、況して下界に於てをや、夫婦の契り前後の怨み、渾て世上の習ひなり、斯程までに美麗しかりき袈裟御前も、死したる樣の淺間しさよと、忽ち迷ひの夢覺て、道心頓に發りては、渡が悲歎も想ひ遣られ、いざ此上は渡に出逢ひ、事の顚末打ち明し、武士の習ひは潔ぎよく、彼れにうたれて怨恨を晴させ、互ひの妄執散せんものと、思ひこんでは猶豫もならず、急ぎ身繕ひして袈裟御前が首携へ持ち、渡が許へと訪ひ到

●渡宅の騒惱

りぬ。然るに渡が方に於ては、夜明けてのち袈裟御前の樒死に心付き、愕くこと一方ならず、上を下へと噪ぐが中にも、渡は無念やるかたなく、何奴なれば此狼籍、仇敵を討得ぬろれ迄は、他人に逢ふのも面目なしと、堅く門戸を鎖さしめ、悲歎に沈み居たりしかば、今盛遠が訪ふとて、渡は容易く面會せぬにぞ、盛遠巧みに言葉を設け、昨夜此家で狼籍した、當の仇敵を盛遠か捕へて此處に持參せり、是非に面會許されよと、聞ては其儘捨置れず、斯くと渡に告げ知らせ、門を開きて案内する、一室の内に打通れと、渡は首なき死骸に對ひ、悲歎に沈む有樣に、盛遠思はず走り寄り、コレ此首を御覽せよと、袈裟御前か首取出し、事の頓末斯々と委細に打明け物語り、餘りに心憂かりしかば、直に自害と思ひしかど、同じくは御邊の手に、掛りて死なん決意より、是れまでながらへ參りたり、妻の敵ぞ討ちたまへ、イザ疾く〳〵と覺悟の体、首指延て待居たり、渡は始終を聞定め、さては汝が所爲なりしか、言ふにや及ぶ妻の敵、只一打ちと立上り、抱込む一刀拔手も見せず、アハヤ盛遠が首打落すと思ひの外、已が髻切り排ひ、返す刀に盛遠が、髻も亦切り捨てたり、盛遠不審の膚を勵まし、渡殿には血迷ひしか、何故ありて首討たぬぞ、氣憶れせしか未練至極と、詰るに渡は涙をうかべ、イヽヤ血迷ひもせず、氣憶れもせず、左はさりながら今となり、御邊を殺すも詮なき事、我れ今朝し方起出で、、首なき妻が死骸を詠め、頓に色香に迷ひ晴れ、深く無常を感せしのみか、武士たる者が妻を討たれ、當の敵を見逃しては、所詮世間へ面出しならず、既に出家と覺悟せり、假令姿は俗なりとて、心は既に慈悲の僧、何とて人を殺さんや、況して御邊が決死の覺悟、試してはと〳〵感じ入る、唯此上は御邊も我も、出家を遂げて亡妻の、後世をとふらひ諸共に、同一佛土の往生ころ、あらまほしけれ願はしけれ、生中今生の我執を起し、來世の苦難を招かんこと、自他れ互ひに由なし〳〵、倩々之を察するに、袈

●渡まよわす所置當を得たり

●兩勇士の發心

婆御前は凡人ならず、觀音菩薩が女身と現じ、我等が道心催ふさせ、玉ひしものにやありぬべく、斯て髻を切り捨てしは、共に出家を遂げなんためのみいかに思すや盛遠殿と、聞く盛遠は感に堪へ兼ね、涙にむせび答へ出ですず須臾點頭くばかりなりしが、俄かに起て席を正し、仰せ一々道理に叶へり、出家は素より望む所、イザ疾く〳〵と促がして、渡は直に其名のまゝ、渡阿彌陀佛と戒名し、盛遠も亦名頭もて、盛阿彌陀佛と戒名し、此世の苦患を遯れしは、いと殊勝なる振舞なりける。ナント諸君、袈裟御前の行ひは感心なもので御座らぬか、實に一般婦人萬世の龜鑑となるばかりでなく、渡阿彌が云はる〻通り觀音の權化と申して決して差支へはない、往昔愛作菩薩と申すは、其姿ゑもいはれぬうつくしき姿、即ち袈裟御前も及ばぬ程の別品、見奉るほどの者は心を掛けぬはなく、色にめで〻心を掛けし者は悉く之を緣として濟度したまふたといふことである、また昔し羅漢の尼がありて至つて容貌

●愛作菩薩の事

●檀林皇后の御事

が端正であつたから、一人の男子が之を見て頻りに戀慕ふた、さうすると尼は肪脹爛壞の相を現じて之を見せたので、男子は其臭穢を見て厭心を生じ、忽ち道を悟りたといふことである、また我朝に於ては恐れ多くも　嵯峨天皇の御后檀林皇后と申し奉りしは　仁明天皇の御母、后にて、古今無雙の美人にてはしませしかば、聞傳奉へる人々は何れも魂を焦し思ひを掛け心を惱せしが、此皇后殊に智德に勝れさせたまひ、朝政を輔佐したまふのみか、浮世の榮耀をば草の露水の泡と知り、深く無常の理を悟り、後世の營みに心を傾けさせられ、五百領の袈裟を御手づから裁縫して、惠蓮法師の入唐するに差添へて育王山の僧に供養あらせられた程の御篤信であつたが、いざ御臨終といふ時に御遺言遊ばされて、我死せば葬送の事ゆめ〳〵致すべからず、尸を野邊に捨て〻曝すべしとありしかば、仰せのまゝに西の郊の野邊の草むらに棄置しところ、日を經るに從ふて膨脹とはれふくれて革甕に水を盛たるが如

●九想の圖

く、爛壊とたゝれ潰えて腸流れ蛆生き蠅集り、色黯然とくろく瘀み、風に吹かれ日に乾きて半ば青く、烏來りて兩眼を啄み穿ち、玄髪拔け亂れて遂が下に纏はれ、犬狼は競ひ集りて掴み裂き曳散して爭ひ食ふ、手足と頭とはみな散々になりて臭きこと近傍に滿ち、其初め懸幕ひし人々も之を行き見ては、臭穢狼籍にして目も當てられず、各〻袂を鼻に支へ目をふさぎて逃げ歸る有樣、これは衆多の人の執心をとゝめて無常不淨を知らしめ、佛道をすゝめんとの御方便であつたといふことぢや、いかにも有難き思召され方で、今此袈裟御前も矢張り此等の類と申して宜しい、夫れだから后世婦女子の龜鑑となるばかりでなく、渡阿彌盛阿彌れよび母衣川にも道心を起させた、即ち贄題に供へたのが衣川の歌である、ドレ衣川の譚を致しませふ。さて衣川は斯くとも知らず、危うき難を遁れしは、これも娘の働きぞと、打ち喜びしてとさへも、一夜の夢の朝まだき、袈裟御前が横死の事、通知を受けては氣も狂亂

●袈裟御前の遺書

心もろくに我家を飛出し、早々渡が許へと來り見れば、首なき娘が死骸のみ渡が前にと横たはり、其淺間しさ喩へんやふなく、ワッとばかりに悶絶しけるが、やう〳〵と我に返り、さては必定盛遠が所爲ならんと思へども、ろれと打明け云はれもせず、涙ながらに手掛りの、遺書にてもあらんかと、搔探り見る手箱の中、紛ふ方なき一通の手蹟は正しく娘が遺書、取る手遲しと披き讀む、ろの文面は左の如し

女はさらぬだにも罪深しとうけたまはり侍るに、うき身のゆへに多くの人を失ひぬべければ、我身一つをうしなひ候ぬ、獨り殘りたはして歎き思召されんこととろ痛はしく侍れ、何事も然るべき事と申しながら、先だちまゐらせぬる悲しみいはん方なくぞ侍る、相かまへて後世をよくとふらひたべ、佛になり侍りなば、母御前をも、渡どのをも、かならず迎へ奉るべし、よろずこまかに申したく侍れども、落つる涙に水莖の跡見へわかず

露ふかき淺茅が原にまよふ身の、いと、暗路に入るぞかなしき

母上さま　　あとまより

衣川は讀下す字々句々一として血の涙ならざるはなく、見るに目もくれ心消ね、悶へ悲しむ有樣は餘所の見る目も憐然にて、悔むも詮なき愚痴の繰言、斯く淺間しき死を遂げしも、皆この母が心得違ひ、さるを露だに恨みもせず死ぬる後まで此母を思ふてくれる孝行心、有難くもまた恐ろしけれ、偖々思ひ廻らせば、甥盛遠が此母を殺さんとせしその時に、いつろ死んで仕舞ふた ら此の悲慘はあるまいもの、甥に手をすり命を乞ひ、死を厭ひしも何んの爲め、娘の行末さかへんこと一日も永く見たさばかり、娘の手に掛け殺して呉れと、無理なる事を言ひける時、物狂ひかといらへしも尤もなることながら親の身として子に向ひ、真珠をみだせといはれもせず、無理難題にことよせて不義を勸めし心底は、首尾克く此場を遁れ得て、後日の二人が榮華かば祈

●衣川の悲歌

●衣川尼となる

らんものと樣々に、後先わかずこしらへしも、我愚痴なる心より思ひ過して此有樣、堪忍して呉れこれ娘と、狂氣の如く泣き叫び、呼んでも飯らぬ死出の旅路、答ふる聲も聞へねば、自然と感ずる世の無常、咏吟みたる一首の和歌「闇路にもともにまよはて遂生に、ひとり露けき身をいかにせん」かくなん遺書の奥に書き添へ、飾りをはらひ尼となり、天王寺へと參籠し、一日も疾く命終して先立つ娘の生所なる、彌陀の淨土に往生して、一蓮上に再會を期せしめ玉へと一心專念、稱名たゆることなかりしが、翌年十月八日の夕暮に、四十五歳を一期として、左したる苦痛の病氣なく、いと安らかに往生を遂げぬることころ目出度けれ。

●白骨の御文

眞宗中興蓮如上人の御文に「（前略）スデニ無常ノ風キタリヌレハスナハチフタツノマナコタチマチニトヂヒトツノイキナカクタエヌレバ紅顏ムナシク變シテ桃李ノヨソホヒヲウシナヒヌルトキハ六親眷屬アツマリテナゲキカナシ

メドモ更ニソノ甲斐アルベカラズサテシモアルベキ事ナラヂバトテ野外ニオクリテ夜半ノケフリトナシハテヌレバタ、白骨ノミゾノコレリアハレトイフモ中々オロカナリサレバ人間ノハカナキ事ハ老少不定ノサカヒナレバタレモ人モハヤク後生ノ一大事ヲ心ニカケテ阿彌陀佛ヲフカクノミマイラセテ念佛マウスベキモノナリアナカシコ〳〵」とあるが、いかにも唯今の寫眞鏡ともいふべき有難き仰せぢや、世の無常は決して他人事と思はず、各自後生の一大事に心掛けられたことである、先づ今晩はこれで」……下座

○第五席（文覺上人の難行、師弟の問答）

なか〳〵に身を思はねば身も安し、身を思ふ故に身も苦しけれ」文（無能和尚の歌）今晩も相替らず早々との御參詣、斯く賑々しき法莚を張るに至りしは、抑者に於て面目以上もなきことで御座る、ろれに引て當文覺上人の御譚も、段々席を重ねてハヤ今晩で五席になりたことぢや、文覺上人も賑らざる事の緣に

逢ふて出家棄欲の身となられし上は、豫て剛毅の氣性を具へて居らる、事といひ、唯今贊題に供へた和歌の如く、更に我身を思ふことなければ苦も苦とは思はず、いかなる難行苦行をも物の數とはせられず、唯國のため法のため人のためにのみ幾多の難難を經て、遂に大願を成就して名を後世に揚かされたことである、諸君方も大事業を成就せんには此身を思はざる、即ち不惜身命といふ精神になりて掛らねばいかぬ、サアこれから追々と文覺上人の行狀を御話しに及ぶことで御座る。爰に盛阿彌は渡阿彌と共に心を合せ、袈裟御前が死骸を後園に葬り、墓を築き石碑を建て、名を戀塚と呼びなしていと懇懃に之を吊ひ、渡阿彌は時の高僧を請じ、剃髮染衣授戒して如法修行の身となれり、また盛阿彌は一心に行道念佛と志し、袈裟御前の中陰一週忌は申迄なく、いつしか三年の忌辰まで修行に懈怠なかりしが、一夜の夢に袈裟御前蓮華の上に安然と、往生得果の妙相を示せると見て覺めしかば、歡喜すること

と一方ならず、即ち華上の影像を寫して之を本尊と共に常々頸にかけ、諸國を修行の其時もこれを離さず喜悅の、あるに就けても憂悲のうの時々もこれを眺め、之を我身の善知識と尊みぬるも強ちに愛執のなほ慈るにあらず、林道春が銘に云ふ、彼之戀レ之者、在レ色耶、在レ節耶、不レ可レ不レ擇也とは、實に道理あることなりかし。かくて盛阿彌は諸國修行を思ひ立ち、名を文覺と改めて鳥羽の里をば出行しが、一日熟々思ふやう、我が一命は先つ年渡に討たれ捨つべきを、渡が深き情誼より今は翔て佛弟子となりぬることころ有難けれ、諸絆を見るに往昔より佛を始め諸菩薩が、衆生濟度の其爲には難行苦行せらるゝ事其例さへ數多し、我も是より只管に難行苦行を歷練して、弱きを扶け強きを挫き、專ら他人を救濟する菩薩行のみ勵まんと、先づ試みに身を責て艱苦の程を見ばやとて、折節夏は六月の草も焦るがぬ暑熱の時、或る片山の藪中へ入りてうの儘裸体となり、仰天さまに打臥して少しも身体を動さ

●盛阿彌の改名

●文覺上人の難行苦行

ず、待づ間ほどなく寄り集ふ、蚊蛇蟻蜂其他の毒虫之に取付きて思ひの儘に螫し喰へど、苦痛を忍び手足さへ働かせずに一七日、斷食してゐ居たりける。さて八日目の晝間過やう〳〵起きて里に出で、是等の事は易行とやまた難行とや云ふべきぞと、逢ふ人毎に問はるれば聞く人何れも打ち愕き、一週間の斷食すら容易からざる難行なるに、毒虫共に身を施し況して身動きせざる儘、一週間も居たりとは難行中の大難行、迚も世の中凡人の爲し遂げ得べき業ならず、さるを和法師が仕遂げしとは尊かりけることなりと、稱へぬ者もなかりしかば、文覺左こそと打ちうなづき、ろれより諸國を遍歷して益〳〵艱苦を嘗められける。かくて文覺上人は諸所の靈場參拜して紀州熊野に到り着き、世にも名高き那智山に參籠せんと分け入りしが、もと此山の瀧といふは日本一の大瀧なれば、文覺上人之を見て茲にまた〳〵思ふやう、我れ是迄に難行の數を盡して仕遂げしがど左迄苦痛を感せねば、今此瀧に下り立ちて三七日

●文覺上人那智山の瀧に於て水行ず

が其間垢離の水行營み見ん、若し不幸にして水行中凍ゐ死になば大願の成就すまじき証據にて、難なく修行を遂げ得なばこれぞ正しく佛神の我を守護して大願を成就なさしめたまふなれど、思ひ込んでは猶豫なく直に瀧へと下りたるは、十二月の十日過ぎ、折しも雪は降りしきり谷の流れもつらゝゐて、音幽なる峰吹く嵐寂寞として欲界の分野とも思はれず、文覺益〻行心を勵ましつゝも瀧壺に飛入りて落ち來る瀧水に打たれて大悲の呪文を誦じ、茲に星日過ぎぬれば流石剛毅の行人も、今は身体冷凍り息絶ゑ果て瀧川へ流れ出しを折克くも、參詣したる甲乙が見付て斯くと寺院に告げ、寄集ふたる人々が

●文覺上人の氣絶

燒火に煖め撫でさすり樣々介抱したりしかば頓て息をば吹き返せり、然るに文覺近傍を見回し、介抱したる人々に一禮さへもなしはせず却て大の眼を見張り、我れ此山の瀧壺に三七日が其間うたれんものと大願を起して今日は僅かに五日目、まだ七日にさへならざるに何奴なれば大願を妨げなんとしつるぞと、取てもつかぬ挨拶に聞く人何れも面見合せ返す言葉もなかりしかば、文覺やをら身を起しまた瀧壺に立戻り元の如くに打たれける、さるに不思議やろれよりは瀧水自然と温かみ、精神も亦爽快にて更に寒苦を感せねば、これぞ此瀧守護なせる不動明王我を憐れみ加護し玉へるものなんめれと、行心愈〻堅固にて勇猛精進日を重ね、遂に難なく三七日滿願の日も過ぎぬれば文覺歡喜斜ならず、ろれよりはまた瀧を出て觀音堂に參籠し、千手經をば一萬卷眞讀せんとの志願を立て、日夜懈怠の色もなくハヤ三年にとなりぬれば、萬卷眞讀の願もやみちけん、人知れずして那智山を下向せられたりとかや。

●千手經一萬卷の眞讀

ナント諸君、文覺上人の難行苦行は古今に其例を見ぬ勇猛精進なことでは御座らぬか、之といふも文覺上人が性質の剛毅なるに依るとは申しながら、其信心の堅固なるより佛神の冥助ありしに違ひない、古書に據れば何れも不動明王の侍童出で來りて常に之を守護したとある、併し拙者は唯之を不思議と

●佛神の冥助

●現世利益和贊

のみして置いたことぢやが、當世の生學者は得て世の中に不思議はない抔と申すけれども、凡智で思議せらるゝことなら不思議ではない、迚も凡智で思議することは出來ず、大悟徹底の人を待ちて始めて之を語るべきことである から不思議と申すのぢや、何事も凡智では分るものでは御座らぬ、殊に見眞大師の現世利益御和讃の中にも、「南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、梵王帝釋歸敬ス、諸天善神コトゴトク、ヨルヒルツネニマモルナリ」、また「願力不思議ノ信心は、大菩提心ナリケレバ、天地ニミテル惡鬼神、ミナコトゴトクオソルナリ。」ともありて信心堅固の行者は佛神の冥助あるものに違ひない、されば文覺上人も佛陀神明の加護を受けられたことであるから此後の事とても其心算で見て否聞いて貰ひたいものぢや、ドレ次の譚に取り掛りませふ。さても文覺上人は佛道修行に身を委ね、日本全國靈山勝地殘すことなく巡拜なし、今又攝津國四天王寺に參詣せられ、此御寺ころ狹毋衣川が信仰なせし靈地なれ、

追福のため暫くは籠りて讀經なさばやと、先づ龜井の水を掬し、佛堂にと禮拜遂げ、また皇太子の御殿に詣で、其外舍利堂十五社を參拜なせば寶塔の莊嚴嶷々と威儀高く、仰ぎ見たりや屈して禮し、實に第一の露盤には皇太子殿下御手から銘して佛法の興滅を標し玉ふに、今も猶佛法繁昌の奇瑞現はれ、四天王の像は折伏し、佛菩薩の像は利生し玉ふ、あはれ此處にして衣川の尼の菩提を祈られし志しころ有難けれと、來し方の事など思ひ出られ、茲にも七日の參籠あり、ろれより一先づ故鄕に立歸りしが何となく市街は物音かしましと、高雄山にと引籠り行道益〻堅固なり、然るにこゝに一日の夕暮何地よりかたどり來にけむ、一人の僧侶訪ひ來り禮を正して述けるやう、吾れ此年頃師德を慕ひ御栖息を尋ねしかど、浮雲の如く御住居の定かならずに過行しが、今日値遇し奉り欣喜の程限りなし、唯此上の御願ひは御弟子となし給はれと、餘儀なき願みに文覺上人打ちうなづきて問はるゝやう、シテ其方の

●高雄山に籠居す

●一僧の來訪

●師弟の問答

名は如何に、ナニ相照とや善哉々々、自今我弟子許容すべし、さは去りながら相照の相照たる義これ如何にと、再び問へば答ふるやう、左眼は右眼を能く照し右眼は左眼をよく照す、是を以て相照といへば文覺また詰り、常途の人でも一眼を盲せざれば皆爾り、豈其方のみ然らんやと、聽いて相照首打ち振り、否とよ常途の人は只見るのみ、吾に於ては決して然らず、左眼は陽の徳を照し、右眼は陰の理を照す、陽は陰に對し陰は陽に對す、善惡とても亦同じ、相對するもへ相と云ふ、左右陰陽善惡といへども一箇の道理を以て照すが故に照と云ふ、日月光は異なれども闇を破するは一用なりと、熊河の辨もて答へしかば文覺上人打ち微笑み、面白し面白し、文覺が此方丈松檜の繁るを屋根とし、篠ばらの連なるを垣とし、草の延るを疊とす、汝が目には如何に見ると問へば、相照答へらく、是れこそ眞の鐵城ならめと、聞いて文覺覓爾とし、然り是れ吾干舍城なり、喜撰法師は宇治山を干舍城と接みなし

●熊河の辨

●王舍城

て、蓮の蕊をつみて食ひ、または松葉を味ひて、仙道をこそ樂しみつれ、我は菓實を食として法文を味ひつ、濟度を樂しむものなりと、いへば相照肯はず、彼處は都の巽にて此處は都の乾なり、何ぞ趣き等しからんと、聽いて文覺瞋を含み、つたなし〳〵經文にも「洙故三界城悟改十方空本來無東西何處有南北」といふならずや、喜撰も如なり吾も如なり、何とて巽乾を執せんといへば相照また諍ひ、若しも究めて無相なりせば誰をか緣し緣せられん果して一心なりとせば何をか思ひ思はれん、本來平等なりとせば母に怒り娘を愛せん、枝末差別のなかりせば何ぞ親疎を分つべき、師今差別を知ればこそ緣あるを先づ吊ひ玉ふらめ、また平等を知ればこそ法界に回向し玉ふらめ、平等の中に差別あり、差別の中に平等あり『本來有東西何處無南北』と觀じて左は右を照し、右は左をてらすが故是れ相照とは申すなりと、聽いて文覺打ちうなづき、しかいへば然りとせん、吾辨論は雙遮にして汝が辨論は雙遮なり

●巽乾の異同

●雙遮と雙照

●雙と相とは別字同意、今師資こゝに寄合て「非有非空亦有亦空」、世尊一代の說法も亦此外にあることなしと、思はず知らず法談に時を移してゐれよりは師弟の契り淺からず、影の形に添ふ如く附從ふて輔佐するのみか、物事談合せざるはなく、此相照が文覺の股肱ところは知られける。いかに絕世の英雄豪傑でも唯一人で大事業を成し遂げたものは少ない、いやないといふてもよろしい、何れも之を輔佐する人がありて程よく成就するものである、殊に宗敎家の事業抔といふものは猶更のことで、師弟相待ちて始めて一宗弘通の端緒を開き、寺門興隆の事業が成就するものぢや、ゐれであるから往古は師弟の間の親密なること眞實の父子兄弟も及ばぬ程であつた、此文覺上人の樣な剛悍短氣な御方でも相照を親愛せらるゝのも矢張り此處の道理ぢや、然るに近來師弟の間が段々淡く成行き、師は弟子を愛するの情乏しく弟子は師を凌ぐの風あり、甚だしきは弟子にして師を陷擠するものあるに至りしは、實に

●師弟の關係

歎きても猶餘りあることぢや、どうか古人の所爲を見習ふて此惡弊を改めたきものである、オツトまた横道に這入りかけた、今晩は先づこれまでとして、明晩は愈ゝ文覺上人の勸進れよび入獄といふ極面白き處なれば、誘ひ合されて成るたけ早々と御參詣なさるがよひ」……下座

●神護寺の緣起

○第六席　（文覺上人の狼籍入牢、大赦、資行の遁世）

世の中の譽れ謗りをいとはねば、心安くもすみぞめの袖」文（一休和尙の歌）

抑ゝ文覺上人の籠居せらるゝ高雄山といへるは、其昔し弘法大師が八幡大神と親しく密乘を唱和し玉ひける靈地なるのみならず、皇國に其比類なき靈驗いやちこなりし淨刹あり、今其緣起の概畧を記さば、稱德天皇の御宇に當り弓削道鏡を御寵愛にて、遂には寶祚をも讓り玉はんとの叡慮より、內々ろの旨を含めさせられ、和氣淸麿をして八幡大神の神託を伺はしめ玉ふに、淸麿ろの事の重大なるを畏こみ、宇佐に詣で、神慮を伺ひ奉れば、「夫れ豐葦原は

●八幡大神の御託宣

神國にして天孫相續して國の政を行ふべし、道鏡即位の沙汰所以あるべからず」との御託宣につき、清麿直ちに立還りて內旨に反き有の儘奏上したりしかば、殊の外なる靈怒に觸れしをもて、端なく高雄山にと捨てさせられしかど固より赤誠ある身は大神の冥助を蒙むり、此地に一寺を建立させて邪法を避け正法を弘めしめんがため、藥師如來の像一軀をさへ下し賜はれり、清麿茲に精舍を建て此本尊を安置して、神護國祈眞言寺とは號したり、ろれより次第に鹿は精となり少は多となり、狹は廣となり小は大となり、堂塔鐘鼓に至るまで何れも莊嚴美を盡し、百有餘歲の其間繁昌をころ極めける。然るに盛者必衰の理は靈場も免れず、文覺上人此山に籠居の頃はハヤ已に四百餘年の星霜を過ぎぬる程に此處彼處頽廢したるのみならず、歸依三寶の其中に佛は昔古の儘なれども、御經は烏の巢虫の食、僧侶は元より住むものなく、思ひのまゝで苔蘚は金鋪に上り傾ける軒に蛛は飛び通ひ、霧香煙と立ちこむれば月

●藥師如來の繪像下賜

●神護寺再興の勸進帳

法燈と高く懸り、寂々と吹く秋の冷風、寥々と鳴く夕の鴉聲、見るにつき聞くにつけ何れも哀れならざるなし、紅楓は谷に滿れども誰れ尋ね訪ふものなくて、適々通ふは猿猴のみ、世にも名高き三絕の梵鐘も撞かねば眠も覺めず心を籠めて作りたる畫楹も雨にうちたゝかれ、斜に殘る欄干は落葉と共に朽ちるに任せ、強くも荒み果てたりける、されば今文覺上人之を見て思ふやう近き世となり王室に艱厄多く成行くは、恐らく此寺荒廢の致す所にあらざるか、我れ方外の身なれども素より皇國の民なれば何とて之を慨かざらん、殊に惣じて出家の行は舊寺を興し或はまた一宇を建立するに在り、吾幸ひに此山に剃庵を結び住みぬること既に宿因なきにあらず、此舊寺をば造營せんこと定めし神慮に適ふべく、また文覺が本意なりと、此由相照にも示し合せ、先づ書き認めし勸進帳は左の如し、

夫、以、眞如廣大、雖三斷二生　佛之假名、法性隨妄之雲厚、覆、自聳二十

二河縁之峰、以來本有心蓮之月、光幽而未顯、三毒四慢之大虛、悲哉、佛日早沒、生死流轉之徒、冥々焉、唯耽色耽酒、未謝狂象跳猿之迷、徒謗人謗法、豈免琰羅獄卒之責哉、爰文覺、適拂俗塵、雖飾法衣、惡業猶意逞、而造于日夜、善苗又逆耳、而廢于朝暮、痛哉、再皈三途之火坑、重永廻四生之苦輪、所以牟尼之憲法、千萬軸々、明佛種之因、隨縁至誠之法、一無不届菩提之彼岸、故文覺、無常觀門落涙、催上下親族之結縁、上品蓮臺、連心建等妙覺王之靈場也、抑高雄者、山堆而顯鷲峰山之梢、洞禪而鋪商山洞之苔、岩泉咽而曳布、嶺猿叫而遊枝、人里境遠而無喧塵、師跡接好而有信心、地形勝尤可崇佛法、奉加徴分誰不助成乎、夙聞、聚沙爲佛塔之功德、忽感佛因、何況於一紙半錢之寶財乎、願再建成就、而禁闕鳳曆御願圓滿、乃至都鄙遠近親踈、黎民緇素、歌堯舜無爲之化、披椿葉再改之咲、況聖靈幽儀、前後大小、速至一佛菩提之臺、必玩三身萬德之月、仍勸進修行之趣、蓋以如件

治承三年三月日　　文覺敬白

己に勸進修行の文出來上りては猶豫せず、諸所を勸化に立ちまはり、弟子相照は洛外より北國筋へ赴かしめ、一日熟々思ふやう、吾大勸進の願望を起して都鄙の別ちなく、一紙半錢多少を云はず布施を受くるといひながら、責て庄園一二箇所寄進なくては再興の基は容易に立ち難し、ろれに付ては法住寺の御所に勸進するころよけれと、文覺上人唯一人身繕ひして草鞋を穿き、法住寺へと參られける、然るに此日折惡く法住寺の御所に於ては、妙音院大政大臣、按察使大納言資賢、源少將雅賢、四位少納言盛定、閑院中將公隆など公卿殿上人參り集ひ、今しも管絃の催し始まりなんとしける所へ、文覺上人聲高に高雄神護寺再興勸進の由頻りに申し込まるれども、因より奏聞すべき

●法住寺の御所

●管絃の能―あり

暇なければ唯奏者のみ聞き置き居たるに、ハヤ其間に管絃の音洩れ聞え始まりぬ、此中妙音院師長公は琵琶の無雙の上手にて、閑院中將は和琴の上手、其他資賢の龍笛に、また雅賢の鳳笙に、盛定の篠笛など、皆是れ拱能の人のみなれば、哀婉雅亮言詰道斷の行處滅の秘術を盡し段々佳興に進みしため、文覺上人暫くは之に心を奪はれて差扣えてぞ居たりしが、待てども〳〵其儘に御返答のなかりしかば、奏者が奏聞せざるとは心もつかず氣を苛ち、待つ間に最早日の影も西山の端に傾けば、如何に御遊と申しなから斯く御返答延引は甚だ以て心得がたし、且つ法皇の御身には淨土の音樂願はるべきに、さる御心掛けありとも覺えず、況して神護寺奉加の儀は、これより申し上げざる先御詮議もあるべき筈、ろれを捨て置き徒らに此世の御遊に耽り玉ふは、何とも以て心得がたし、いで今一度とツト立ちあがり、素早く口々走り入り御庭の眞中に立ちながら、大音を上げ呼はるやう、これは高雄の聖文覺と申

●御所の御庭に於て文覺上人勸進帳を讀む

す者、神護國祚眞言寺再興の爲に大勸進を企て候、今生の御遊は一夜の夢ぞかし、珍しからぬ管絃より當來の善種を思召され、勸進帳を聞し召させ玉ふべしと、益々瞋恚の聲張り上げ勸進帳を讀み出せば、俄かに絃歌の調も紊れ、一時に興もさめ果て殊の外なる御震怒にて、武士はなにか引摺り出せと、仰せの下に青侍七八人も飛びかゝり、出でよと押せども事ともせず、突きのけ拂ねのけ拋け飛ばし、寄せつけもせず愈〻瞋り、法師が勸進何咎あらん、早く庄園二三箇所寄附の院宣願ひ奉ると、更に出づべき樣子なければ、平判官資行は餘りの事に堪り兼ね、走り懸りて組付くを文覺上人振り離し、勸進帳を取直し力に任せて打ち据れば、資行仰天に打ち倒され、烏帽子は脱けて飛ぶ不仕末、資行手早く起き上り、烏帽子も取らず其儘に逃げて姿は失せにけり、斯くて文覺上人は面色さへも變り行き、法衣の下の太刀引き抜き、寄せ來る者を斬りまくり、縱横無盡に狂ひ廻り、阿修羅も斯くやと思ふばかり、

●文覺上人の亂暴

●大力無双の勇士と法御

●文覺上人の入獄

血眼になり殿上にも切て入りなん勢ひに、御所の御座をも移させ玉ふ一方ならぬ騒ぎなり。爰に信濃國の住人にて安藤右馬太夫右宗といへる者、折節武者所に伺候居たるが、今此騒動にと馳せ向ひ、文覺上人の不意を見濟し、むんづと組付き小肘取れば文覺上人得たりと引寄せ、骨もひしげと擲げ付くるを右宗も亦大力にて、すかさず掛りて押し伏せる、大力無雙の勇士と法師、押し付け拂ねのけ少時は勝負の程も分ざりしが、漸く大勢寄り合て手どり足どり搦めたり、文覺上人無念に堪えず尙も御殿を睨みつめ、剃髮染衣の文覺を斯くする事の無法やある、追付け思ひ知らせんぞと齒がみをなせど多勢に無勢、是非に及ばず引出され、狼籍者と獄裏に入れられ、思ひ設けぬ囚人となりしことところ哀れなれ。ナント諸君、文覺上人の此時の擧動はどのやうにあつたで御座らうか、今これを想ひ出すさへ身の毛がよだつやうで御座る、併しこれといふも文覺上人の心中には一点の私なく、贊題に供へた和歌の通り、世の中の擧れ謗りに頓着なく唯眞護寺の再建がしたいばかり『心安くもすみぞめの袖』世捨人の何條憚るべきことやあると、自信の强きは却て此大騒動を惹起されたものである、元より惡意から生じた亂暴でないので赦免の事も自から速かつたのであらふ、それに此亂暴が緣になつて遁世を遂げたものあるは矢張此贊題の意で、如何にも不思議なやうなことぢや、序ながら御話し申しませふ。

●平判官資行の遁世

爰に平判官資行は生中文覺上人の亂暴を取鎭めんと手出なし、却て文覺上人に烏帽子打ち落され、公家にも武士にも嘲り笑はれ、面目あらざる由をも、已れと出仕を見合せ居たるに、一日髻切拂ひ遁世の意を示せしかば、妻子の愕き一方ならず、コハ何事ぞ御物に狂はせたまふものなるかと、前後不覺に歎きける妻子を愍れみ資行は本意を打明け述るやう、吾發心の萌せしは昨日や今日の事ならず、疾くより思ひ立ちしかども、君の御思淺からぢ、又住慣し恩愛の家の執着離れ難く、一日〳〵と送りしが、去ぬ

●此世の無常

●閑亭の公羽

る管絃御遊の時、微紗の物音聞くに就け、ます〳〵此世の無常を感じ、樂みはこれ苦みの種蒔くものぞ、喜びは憂ひの基を築くなれは未來佛土の往生こそ眞の快樂を受くるなれ「妻子珍寶及王位臨命終時不隨者唯戒及施不放逸今世後世爲伴侶」と思ひ極めしろの處へ、折克く文覺亂入して御遊を妨げ奉れど、これも勤進修行にて固より後世の爲なりと、思ふに就けては今ぞ猶吾發心の緣ならめ、人に惜まれ凡心の起るは却て後世の障り、此身に耻辱を取りたらば二たび人前の交りならず、唯此上は諸人に嘲り笑はれ飽迄も耻を受けなん覺悟より、一手も出さず文覺に突き倒されて烏帽子をも打ち落されて其儘に拾ひも取らず立ち退きたり、此事努々云ふまじと思ひしかども歎きにはだされ、吾本心を明すなり必ず他人に洩らすなと、諭すも此世の緣の切れ目人の譽れや謗りをも厭はぬ身となり今はハヤ「心安くもすみぞめの袖」打ち拂ひ菩提の門出、是れなん即ち閑亭の翁ところは知られける。さても文覺上

●相照御の出牢を新る

●文覺上人の斷食

人の弟子相照は師の坊が斯々の事よりして入牢ありしと傳へ聞き、急ぎ都に立ち還り樣子如何にと探り見るに、此度の事なか〳〵に容易ならざる狼籍にて、御所の震怒ひと深く出牢の期も知りがたしと、聞いて相照心をちゐず、何卒して師の坊を救ひ出さん方便やあると樣々思ひ惱みしかど、素より出家の身をもちて力業にも及びなく、所詮これぞとひふ程の好き考も付かざれば唯此上は佛神の冥助を祈る外なしと清水寺に參籠し、一七日が其間斷食なして祈念を凝らしぬ、然るに文覺上人も獄裏に入りて思ふやう、我神護寺を再興の大願望を起してより之と生死を共にせり、若し此願望成らざれば生きて甲斐なき此身なり、されば之より斷食して生死の程を試みんと、入牢の後は飯食のみか湯水一滴飲むことなく、日數を經れど左程まで瘦せ衰ふる氣色も見ゑず、口に何やら唱へつゝ、牢番どもを瞰め廻せば、牢番始め掛りの役人小氣味惡くも思ふ折柄、偶〻上西門院のさせる御惱もなかりしかど俄かに隱れ

●文覺上人大赦に遇ふ

たまひしかば、院中は申すも更なり皇上にも強く歎かせたまひ、爰に非常の大赦をば仰せ出され罪人の追ひ放たる、其中に文覺上人加はりたり、相照斯くと聞く嬉しさ、取るものさへも取敢ず急ぎ出迎ふ途次、法師の來るに出逢ひしは正しく師の坊なりしかば、相照悲喜に胸迫り涙に烟び暫くは物も得いはぬ有樣に、文覺上人相照が心を察し之も亦法衣の袖を霑しぬ、ろれより師弟つれたちて先づ清水に參詣し、高雄へてろは還られける」……下座

○第七席　（文覺上人の流罪、難船、頼朝公の親交）

か、る時さころ命の惜しからめ、兼て無き身と思ひ知らずば」（太田道灌ノ歌）爰に文覺上人は一日窃かに謂ふやう、我れ獄中に在りし時斷食日數を重ねしかど、左まで疲勞なきのみならず、無事に赦免に遇ふたるは、大願成就の証據ぞと、欣喜斜ならざれば、夫よりはまた日毎々々市街に出で、勸進し、一紙半錢厭ひなく普く乞受け廻られしが、元より剛毅の氣質と云ひ、假令貴人の通行あるも更に怖る、色なきのみか、道も讓らず素知らぬ体にて、噫哀れむべし高官に昇りて榮耀を誇すといへども、是れ夢の世の戯れ事なり、許多の供奉があればとて冥途は定めて一人旅、朱纓を錦茵に粧へども野分の前の草の露、消行くことを知らばとて後世を祈らぬ愚鈍さよ、南無阿彌陀佛と諷

●文覺上人の諷諫

●文覺上人伊豆に流流となる

諫し、また武官等の行列凛々しく道るを見ては高聲に、ヤレ哀れさよ〳〵、千萬石の身上を松と竹とに比べたとて、雪折れしたる其後は鳥邊の山の薪なり、七雄五伯も名のみぞや、さても笑止と嘲り散らし、まだろれのみか社寺の御所にて御寄附の沙汰なきを樣々惡口なしければ、終に公卿の詮議となり、右大將宗盛卿奏聞に依り流刑と定まり、伊豆の國へと流さるべしと、即ち國守仲綱に此由仰付けられたり。斯くて文覺上人は流人の身となり武士の手に渡されて都を出で、山科過ぎて何となく、かなしの宮の秋風と心も流石いぞかねど、足をとゝめず追分の片原町を走井の水の流れに影見れば、辛き

汐木の松ならで蒸物にして腰がらみ、耻かしき目に逢阪の關山越へて志賀の里、我身の上は湖を弓手に見つ、旅人の知るもしらぬも粟津が原、勢多の長橋うち渡り野路の玉川草津の宿、たのが手原を動かして作りし罪は金山や、石部を過ぎて横田川流れはつきぬ和泉村、水口祝ふ民草の耕し耘る營みを憐れとも見ず玉殿に、笙を吹かせて暑き日も龍皮の團扇ひるがへし、寒き夕も白拍子羅綾錦繡まとひぬる偖情なき世なりけり、此日いつかは更らんと君が惠みを松の尾の神は大山是はいな土山の宿上りて下り、伊勢と近江の國境時雨る雲の行通ふ駒の蹄も汗をする鈴鹿の坂の七曲り、八十瀬の波にぬれ〳〵て關の打橋うち晴る阿野の津にころ着きたりける。さてこれよりは船路にて伊豆に赴くことなれば、暫時濟なき日を待つ中文覺上人思ふやう、かゝる些細の罪過にて遠流に遇ふこと嘆くに堪へたり、所詮大願成就せぬことにてやあらんづらん、是より船中幾月の日數を經とも斷食して願の成不を試みん、

●文覺上人又々斷食す

●遠江灘の難舟

若し幸ひに存命なば早晩大願成就の靈驗と、またもや茲に誓ひを立て、夫より間なく船出して日數を經れど飲食せず、物をも言はず座したるまゝ、眠れる如き有樣に、守護の役人氣をもめども詮術もなく居たりしが、ハヤ音に聞く遠江百里の灘に差掛れば俄かに大風吹き起り、逆卷く千尋の浪打ち寄せ、船を自由に搖り動かせば、船長始め水手一同必死となりて働けども、次第々々に天候は惡しく濤は益〻荒く成行き、船は落葉の蛛網にかゝりて風に狂ふが如く、覆へらんか破れんか迚も通る、術なければ、船中一同に噪ぎ出し、念佛稱へ陀羅尼を誦し、助命を請ふて泣き喚けど、文覺上人唯一人面色一つかはらばこそ、矢張り眠れる如くにて身動きもせず居たりしかば、人々不審堪ねやらず搖り動かして口々に、斯く怖しき折節に寐て居玉ふことやある、起きて共々力を添へ助命を祈り玉へかしと、いへば文覺上人も少しく身体を起し掛け、惚じて湖を渡るには少しの風波はあるものなり、さるを騷ぐは船頭

の邪魔にころなれ役には立たず、今文覺が靜まり居るを有難しとは思ひもせで、起きて共々騷げといふは、返す〳〵も愚痴の至り、殊に此船沈まふとも また破れふとも文覺は固より命を惜まねば敢て怖るゝこともなし、さは去りながら己れ等が命を惜み文覺を恨まんも亦憐れなり、いで波風を靜めてやらんと、船端にツト立ち上り大音に呼はるやう、龍神ども龍神ども、此船には大願ある文覺が乘り居るぞよ、汝等如來の前に於て千手の持者を守護せんと誓ひしことは忘れたか、此文覺は千手の持者ぞよ、急ぎ此船汝等が手に擎げ頭に戴き行くべき處へ送るべしと、言葉の中にも次第々々風和ぎて波靜まり見る〳〵眸裏長閑なる日和となれば役人始め、船長や水手乘合まで不思議の思ひ彌增して、俄かに文覺上人を崇敬すること一方ならず、御手水をや奉らん御沓をや取りなむと、今の今まで蔑りたる人の心も海面と共に變りて夫よりは粗畧の振舞更になく、萬事につけて子の親を思ふが如く渴仰し、終に難

●文覺上人龍神を呵す

●風波俄に鎭解す

なく日を重ね船は伊豆にと着きければ人々厚く禮を述べ別れ惜くも夫れ〳〵に家路を指して立ち去りける。トキニ諸君、此文覺上人が難船の時平氣で居たのは、誓願に供へた和歌の通りで、固より生命を惜む氣はなく、大願成不と生死とを俱にしたる大決心、即ち覺悟の前の事ぢや、殊に佛敎の極意といふは「轉迷開悟、信心決定、大事に臨んて狼狽せぬ大決心を得るのだから、此等の人は澤山に古來例類もある事故、別段怪しむこともないが、彼の龍神を呵つた事は隨分奇体に思ふであらふ、併し經にも八大龍王が世尊に向つて三和の持者を守護せんと誓つた事あり、また見眞大師の和讃にも「南無阿彌陀佛ヲトナフレバ、難陀跋難大龍等、無量ノ龍神尊敬シ、ヨルヒルツネニマモルナリ」、とあつて見れば、決して其事なしといふことは出來ぬ、呉れ〳〵も疑惑心を取除いて聽聞するのが肝要ぢや。斯くて文覺上人は名古屋寺にと籠られしが、もと此寺の本尊は觀世音菩薩にて靈驗ありとの聞え高く、

●敎佛の極意

老若男女參詣の常に絶ゑたることなきに、今度籠居の上人は流人なれども凡俗ならず、數々奇瑞現はせる稀有の聖者と傳へ〳〵、日に增し參詣夥しく成行く一日の夕間暮、草鞋を穿きて笠を手に持ち、詣でる一人の旅僧を能々見れば相照なり、文覺上人嬉しさに覺えず椽迄走り出で、さてもこれは相照坊能くこそ尋ね來りたれと、聽く相照はなを嬉しく、さては師の坊御懷かしや御健勝なる御顏色拜して恐悦仕つると、語らふも尙眞實のこもる師と弟子二人の者、それより後は此寺に俱に籠りて心を合せ、朝な夕なの看經も大願成就を祈るより外に望みのなき身には、その徒然を慰むる業にも器量ある人を求めんものと思ふより、茲に文覺上人は參詣なせる諸人の望みに任せ人相を見ると披露をなしたるに、我も〳〵と請ふ人の越方行末見定むる、その言の葉の露ばかり、違はぬ不思奇に世の取沙汰、ます〳〵高く成行くを是より先此伊豆に流人となりし右兵衛佐頼朝公が聞き玉ひ、素より願ひある身やへ相

●文覺上人人相を見る

●流人右兵衛佐頼朝

させたくは思はれしも、狠籍惡口の罪により流され來る文覺に親しみなむは世の聞ゑ如何あらんと心付き、先づ試みに家臣なる藤九郎盛長に旨を含めて差遣はし、弟子相照に面會して種々樣々の話しの序、主君頼朝卿の房に忍びて面會致したく申入るれば相照心得、其由文覺上人に告れば强く喜ばれ、近日夜分人目を忍び必ず推參あれかしと、相照をもて速かに挨拶あれば盛長も打ち喜びて委細に約し、其日は夜々暇を告げ急ぎ館へ立歸りぬ。斯くて右兵衛佐殿は一夜密かに忍び出で、盛長一人召連れて名古屋寺にと赴かれ、幸ひ人のなき折節文覺上人に面會あり、吾父れよび祖父とも官謀を受け死耻を晒せしのみか吾も亦、遠流禁錮の身となりて最早此世に望みなし、願くは師の弟子となり出家を遂げたく思ふなり、如何思させたまふやと、問はれて文覺上人は須臾答への言葉もなく、脇目もふらず熟々と佐殿を見詰め居たるが、俄かに起て座を譲り禮を正して云はる〻やう、さて〳〵珍らしき御相かな、

●頼朝公文覺上人と面會す

●大將の相

●文覺上人頼朝公に旗擧を勸む

容易く見がたき御相を〻へ篤と見定め參らせたるに、穩和にして威應あることは決して比類あるべからず、日本六十餘州をば奉行し玉ふ適れの大將たるべき御相なり、何とて出家したまふべきや、味方を集め旗擧げして源家を回復したまへかしと、鵜く佐殿は心中に喜ぶことを色にも見せず、流人の身にて旗擧げなど思ひも寄らぬ事どもなり、唯此後は經讀むこと數へんために我方へも折々訪ひ玉はれと、餘談に暫らく時を移し、館へこそは歸られける。さて夫より後文覺上人折々佐殿の館を訪ひ、表は經文讀誦に云ひなし、裏は密々佐殿に赤誠こめて勸むるやう、平家にては小松殿智仁無雙の人なりしが、一門の運盡きぬるためにや、去年八月薨じ玉ひぬ、今源平の其中に貴公にまされる人はなし、早く仁義の旗擧げして、奢る平家を討ち滅し、近くは父祖の仇を報じ、遠くは天下の泰平を謀り玉へと、細みある言葉に佐殿打ち喜び、今はやう〳〵本心を打明けたまひ聲を密め、實に有難き仰せなれども勅勘の

身の悲しみは、矢一筋を放たんも直ぐ朝敵の名を受けなむ、若し勅勘のもりもして院宣だにも蒙らば、其時こそは旗擧げして父祖の仇をば報ずべしと、聽いて文覺上人は、ソハ如何樣に一理あり、其儀ならば文覺に存ずる支細なきにあらず、二十日ばかりも待ちたまへ、急度吉相見せ申さんと、堅く約して立ち別れしが、其次の日より文覺上人、二七日が其間禪定に入り世の人に面會せぬ旨云ひ觸らし、晝夜を分ず陸地より密かに都へ馳せ上り、外戚につき緣由ある前兵衞督光能に委細を告げて蛔朝の勅勘御免と、平家をば征討すべき院宣を下し賜はる其事に只管頼み聞ゑしところ、ものより奢る平氏をば厭ひたまへる事といひ、容易く院宣賜はるべき由を見定め飛立つ嬉しさ、又も晝夜を分すして急ぎ伊豆へと引返し、禪定滿るろの日を待ち、早々佐殿の館を訪ひ行き、御望みの院宣は日ならず屹度到着すべく、文覺見屆け參りたり、いざ旗擧げの御用意あるべし、御開運も疾く中偏に祝し奉る、夫に

●文覺上人庄園の寄進を乞ふ

就ては文覺が茲に一つ御願あり、もと文覺が此伊豆へ流されたるも高雄なる神護寺再興なさんがためなり、今貴公にして天が下奉行し玉ふことなれば、先つ神護寺へ庄園を御寄進ころ願しけれと、聽いて佐殿微笑み玉ひ、いかにも運京く軍に打ち勝ち、日本國を奉行せば必ず望みに任すべし、文覺上人頭を打ち振り、イヤ物事が手に入りては中々惜くなるものなり、廣き御國の其中にて此文覺が望むのは庄園僅か十餘箇所、先づ丹波國に新庄本庄雀郡宇津繩野、播摩國には五箇の庄、土佐國には高賀茂郡と、十三箇所を撰出し、紙筆を取りて委細を書き付け、何卒之に御寄進の御判を加へたまはれかしと强ひつけられて佐殿も笑ひながらに書判据ゑ、いざ取らすぞと渡されたり、然かるに其後案に違はず、治承四年七月五日散位光能奉はりて、勅勘もゆり院宣さへ正しく下し賜ひしかば、佐殿强く打ち悅ばれ、これも偏へに上人の御計ひに依る事と、ろれより後は以前に増し、殊更文覺上人を崇敬せ

●勅勘御免と院宣

られ物事に談合をころ深げられける、されば文覺上人も亦赤心もて補佐せられ、十二箇條の訓誡をも委しく書て與へられ、水魚の交り淺からず、只管時機の到るを待たれぬ。

サア段々御話が進んで來て、愈〳〵文覺上人の大願成就が近くなつた、惣じて物事忍耐力がなくては成就しないものぢや、文覺上人の『精神一到何事不成』といふ處は、諸君も見倣れたことである、先づ」……。（下座）

○第八席（文覺上人の大願成就、戀塚寺の建立、對客問答）

れもへた、滿ればやがて缺く月の、十六夜の間や人の世の中』文（澤庵禪師の歌）實に讀題の和歌の如く滿れば缺くる浮世の敢果なさ、平相國清盛公今を盛りと御座せし頃は、之に盾つくものとてなく、榮耀榮華を極めしのみか、恐れ多くも大君を凌ぎ奉れる勢ひなりしが、小松内相重盛公これを苦にやみ斃去の後は、日々に傾く平家の運命、大君始め民草まで平家を厭ふ心强く、遂に

平家を追討の院宣さへも下るに至り、時機や熟すと頼朝公は石橋山にと旗擧げせられ、木曾に義仲間もなく起り、世は刈菰と亂れ立つ中にも清盛入道の熱に惚みて薨せられ、益ゝ平家は衰へ行き、範頼義經兩大將はハヤ西上の途に着き、頼朝公は本陣を鎌倉の地に搆へられ、萬機の指揮に怠りなく、昨日に替る今日の御威勢凜々しくころは見紀たりける。然るに木曾の義仲は破竹の勢ひ進むに前なく、早くも都の近國まで攻登りしがば今はハヤ、平家の一門都にも止まり兼て、哀れにも三種の神器と幼帝を供奉して西に落ち延びたり、斯くて義仲都に攻め入り、旭輝く勢ひもて武威に謗れるのみならず、素より田野に生長して更に禮法知らざれば、我意我儘を增長し、亂暴狼籍言語に絶ゑ、また其部下の兵卒は濫りに町家へ亂れ入り、思ひの儘に資財を押し取り更に憚る色なければ、奢る平家に彌增る民の疾苦を見兼ね玉ひ、法皇御所より壹岐判官知康をもて義仲へ院宣下し賜ひしかど、義仲元より院宣の儀

●石橋山の旗擧

●義仲の無禮

も辨へぬ無禮の働き、壹岐判官を散々に罵り辱しめ追ひ返せば、知康强く打ち腹立ち、御所に奏して義仲を追討せんと企だて、却て義仲に撃ち破られ終に御所まで兵火に罹り、恐れ多くも法皇は五條の内裏に籠らせたまふ御悼はしき有樣に、知康急ぎ其由を鎌倉に告げ討手を請ふ、程もあらせず範頼義經、都に上り義仲を難なく攻めて打ち滅し、夫より西に落ち延びたる平家を攻めて一ノ谷、矢島もやがて落陷れ、壇浦にと追ひまくり、茲に全く平家を滅し、今は源氏の世となりて、亡き義朝にも贈官あり、頼朝公は六十餘州總追捕使の榮職を擔ふ身ところなられける。斯くて文覺上人は世の成行に眼を注ぎ、頼朝公の開運を只管願せられたる其甲斐ありて平家は亡び、頼朝公は日本を奉行する身となられしかば、我言の葉の露ばかり偽りなくて此上は、我大願も成就する時來れりと打ち悅び、早々鎌倉にと飛越し、頼朝公に對面して祝賀の旨を述べらるれば、頼朝公も打ち喜び厚く上人を饗したまひ

●義仲及ひ平家の滅亡

●六十餘州總追捕使

●今昔の感

、我れ流人より一躍して此榮職に昇りしは偏へに上人の御勳、我を勵まし誡しめて身の過ちを未前に禦ぎ、今日あるを得せしめたる御恩は如何で忘れんや、唯此上は一日も早く神護寺再興せらるべし、庄園の儀は約束通り相違なく寄進せん、何なりとも望みの筋は遠慮なく申されよと、いと有難き仰せの數々、文覺上人今昔の感に堪へ得ず涙に咽び、光榮餘る其御言葉文覺身に取り勿体なし、神護寺再興にして成就せば外に望みのなき文覺、いでこれよりは都に歸り貴公の威を假り再興に着手すべしと暇を告げ、夫より直に都に上り相照とも談合して、茲に神護寺再興を創められしに其以前、物狂ひよの物乞ひよと輕蔑居たる人々まで今は往昔と打て變り、六十餘州總追捕使頼朝公の御師匠、世に比類なき大法師と崇敬すること大方ならず、勸進なきに先方より我も〳〵と寄進の輩、日に增し殖えて參詣の老若男女群集し、佛閣、僧院、客殿、浴室、鐘樓々門悉く瞬く中に成就して、莊嚴前時に十倍の

●文覺上人の大願成就す

●親鸞は幸福の母

光り輝く有樣を、眺めし時の文覺上人、心の中の歡喜は如何なりけむ想ふだに、拙なき筆には盡せざりけめ。ナント諸君、神護寺再興の成就した時文覺上人の心中の歡喜は實に如何で御座つたらふか、中々一通りや二通りの喜悅ではなかつたらふと思はれる、諸君も御承知の通り、此大願を成就したひと思ひ立たれたばかりに、牢に這入り島流しに逢ひ、ろれは〳〵言語同斷の艱難辛苦を嘗められたことである、併し艱難は幸福の母といふ格言もあるから此艱難がありたればこそ神護寺再興の大願を成就せられしのみか、爾來幾多の弟子小僧に侍づかれて不自由なく、天下萬人の崇敬を受けふる、幸福の身になられたことぢや、殊に伊豆に流されて頼朝公に出逢ひ、之を輔佐して源家を回復し、また其威力に依りて神護寺を再興せられし處は、實に人爲とは思はれない、此等は全く佛神の加護といふべきことであらふと思ふ、兎角佛神は善を助け惡を滅したまふことは、平家の衰亡または木曾義仲の破滅等の

事蹟に就て見ても分る、菅原の道實公が「心だに誠の道にかなひなば、祈らずとても神や守らん」と、咏せられしも此處の道理ぢや、贊題に供へた和歌の意味をも玩味せられて、平家や義仲の覆轍を踏まぬやうに致したいものぢや、ヤアまた樹道に這入りかけたぞ、例の如く閑話休題か。さても文覺上人は高雄神護寺再興の事障りなく終りを告げ、尚ろの跡に殘りぬる木材等のありしかば之を鳥羽にと持ち運ばせ、茲に再び戀塚に一宇を建て、其名をば戀塚寺と呼ばれける、然るに一日弟子相照師の坊に打ち向ひ、憚かる色なく云ひけるやう、師今高雄の舊寺を再興なさん大願を天下に披露ありしため、或時は難にも値ひ、また或時は十方の信施を受けし其上に、武衛の御寄附ありしに依り、斯く再興の成就してさぞ滿足に思すらめ、さるに又もや此土地に寺を建立したまふ事、なほ當初の御愛執止ざるにやと世の人の、申さんことは口惜く思召したまはずやと、聽いて上人打ち微笑み、世間の人が如何やうに申さふとも、聞きもせまじ、また答へをもすまじきかど、相照汝が心得までに吾本意をば語るべし、抑吾身ろの最初袈裟御前を假想して、愛念深く止めても止め兼ねたる煩惱の心の駒の狂ひ出し、姨母衣川が涙を見てもなかなか鎭めんやうもなく、之を嚇して逆罪を果せしほどの愛執なりしが、吾を欺き死したる袈裟、吾とて女に欺かれ何條嬉しく思ふべき、いかなる人も欺ける女を戀慕すべけんや、吾れ首を切り持ち還る其時は尚愛執の堅固なりしは今以て袈裟が首とは知らざる故なり、其後渡が首にはわらで袈裟が首ぞと知りたる時、さては吾をば欺きしか憎き女と思ひける只ろの刻愛執の妄念忽ち消え失せたり、然るに今や此寺を建立なして別の名を用ひず元の其儘に戀塚寺と名けしも、此戀の字の其意味は即ち後の世の人に袈裟御前が節義をば戀慕させんが爲めにして、之をころ順とは云ふらめ、また一つには此寺を建立するは吾がための善知識にてありしかば報恩謝德の意なり、出家を以て知

●戀塚寺の建立

●愛執の消失

●順逆の二樣

●后世の龜鑑

識とし在家の發心することは珍らしくもあらねども、今は是れ出家の我身在家を以て知識とし、猶ろの恩を忘れずして之を報ずることなれば、之をこそ逆とは云ふらめ「證則煩惱即菩提迷則菩提即煩惱」、かゝる節義貞操の女は實に出家に勝れり、盧受信施の出家の身は實に在家に劣りたり、されば強ち順逆に拘はるべきことにもあらず、殊に世の中道途の女は節義を知らぬ習ひにて、近江國の築間祭、項く鍋の其數を重ねて二十の上を超す者さへある に袈裟御前、母に孝あり夫に義あり、吾を欺き死を怖れず、比類稀れなる賢女なれば、不義をたゞさんろが爲めに、塚を築き寺を建て、永く其名を後の世に傳へんといふ文覺が志にてありけるぞと、平素に似ざる感懇の論しに相照感じ入り、涙をねさへて退さける。此文覺上人の教訓はいかにも有難いことぢや、實に建國二千五百五十五年の久しき今日に至るまで、此の如き節義の婦女は決して其比を見ずと申して差支へがなからふ、文覺上人が愛執の

●近江國築間祭

念を絶ち得ずして塚を建てたと思ふのは最も凡俗の甚だしき愚見ぢや、ろれだから佛法嫌ひの儒者林道春でさへ銘に『彼之レ戀之者、在レ色耶、在レ節耶、不レ可レ不レ擇也』と云ひ、また「吁節婦分、惟孝惟義、石可レ泯分、貞名不レ已」と稱揚したのである、序に此近江國の築間祭といふ事を御話し致さふ其祭の慣例として其所の女どもが男に偶いたる其數の鍋を項いて社の前を通るので、往古から鍋一つ項いて通つた女はない、其神の御託宣にも我山の滅せん時鍋一つ項きたる女わたるべしとあつたといふことぢや、ところが一年其邊に住む男が幼少より一人の女を妻と定めたので、吾妻ころは鍋一つ項くならんと思ひしに鍋を九つ項いた、ろこで大層立腹して直に離縁すると、其夜の夢に神が現じて汝は最早獨身で居るかとの問ひ、男答へてイヤろうでは ありませぬ、不淨でない女を尋ねて妻とするといふた、ろうすると神が重ねて、世の女は多くは鍋十二十と項くに汝が妻の如きは少ないぞといはれて目

●改名の理由

が覺めた、これから熟々と考へて見るに、いかさま昨日の祭に我妻程鍋の少なかつたのはない、他の女は隨分姫御前といはるゝ者でも二十三十と項いて居た、依て早速離縁した女を戻して舊の如く愛したといふことぢや、併し此等は沙汰の限りであるが、袈裟御前の如き節義の女は萬世の龜鑑と申さねばならぬ、どうか御婦人方は之を戀慕なさるが宜しい。さてまた或日一人の客あり、文覺上人に面會して話しの序問ひけるやう、上人初め盛阿彌と俗名の一字を用ひ、其後文覺と變名ありしは定めし思召しもあらんづらんが、吾友に韻鏡を習ひ覺えし者ありて、文覺のかへし字は學の字に飯ると申しき、果して爾るものにやと、聽いて上人答ふるやう、吾名を文覺と改めしは曾て聞く提婆達多、六萬の法聚を誦し得ても空しく无間に墮落せり、又周利槃特が「守口攝意身莫犯如是行者得度世」と七言二句の文を覺え、羅漢果を得たりとかや、是故に吾も亦何れの文なり能く覺え、之を修せんと思ひしかば、覺文とやせん文覺とやせん、覺の字の死活の不同いか、あらんと考へしが、覺の字を活字にしては言便強くて面白からず、文覺の字を死字に使ふ其時は却て文盲の者と見え、我身に相應する事と偖は文覺と定めたり、彼の槃特に幾倍して愚痴なる此身なれば、皈納の字が學といふこと一向に知り申さず、されども俗の其時に韻鏡を見しことあり、妙西の歸納といふは迷の字かと思ひぬるに、妙西と名のつかぬ尼とて強ち悟者にもあらず、妙西は是非ともに迷ふにもあらざるべし、惣じて名の字を性に合せ、歸納の字を吟味するのは、閑人の爲ることとなり、修行に忙しき法師などが弄ぶことにあらず、去りながら出家にも詩を吟し文を書き、博覽を旨として講師よ能化よと尊敬され、得意の人が多かるべけれど、名利の病癒えがたく、佛につかふる手足なく、飽まで食ひ暖かに着て、三面の僧房に午睡をしたり、聖教の中より首をいだし菓子よ濃茶よと侍者を責めつけ、官途の望みはありといへども、菩提の昇進

●歸納の字

●菩提の昇進

は更に無し、斯くては假令物を書き書を讀だりとて所詮やある、佛に給仕の赤心なくば其罪愈〻深重なり、此文覺は物をも得か、す書をも得よまぬ文盲なれば、公の如き物識の御相手には成がたし、其上最早晩鐘間近く、佛に給仕の時分なれば、追付け出堂仕つらん、餘力ありなば文をも學び書をも讀みなんものなれど、出家に閑はなき故に得て學問もなりがたし、あはれ半日の隙もあふば何なりとも御指南に預かりなんものなるにと、思ひの外なる返答に客人却て面目なく、用なき名の字を問ひしため諷じられける口惜さと、悔めど今は詮方なければ、暇乞ひして忽〻に我家へぞ歸りける。

●客人の閉口

ナント諸君、此文覺上人の返答は御互ひに耳の痛いことでは御座らぬか、併しこれが文覺上人の文覺上人たるところで御座るテ」……下座

○第九席　（文覺上人六代御前の助命の爲鎌倉に下向す）

消すとて頼む命にあらねども、今朝まで露の身ぞ殘ける」文　（六代御前の歌）

●平氏の餘黨を探求す

嗚呼榮枯盛衰は四時の順環するに均しく、昨日までも奢り極めし平氏繁昌の世は、ハヤ夢と過ぎ去りて、今また源氏の世と成り行き、之に緣由ある文覺上人も時めくを左まで好まず、一日倩々思はるゝやう、頃日佐殿執念くも北條四郎時政を上洛なさしめ密み居る平家の子孫を探し求め、いと幼きは水に沈め土に埋みて之を殺し、や、成長し者共は之を首刎ね失ひて、根を絶ち梁をば枯らさんとし玉ふ事を聞きながら、餘所に過ぎんも無慈悲の至り、されども乳母の手にある子まで殘らず救はんこと叶はねど、せめては七歳以上の兒だけ我弟子として出家を遂げさせ、亡き人々の其跡を吊はせなば一つには源氏の後世の祈禱にもなりなむものと思ひ定め、茲に兒をば求むる由廣く披露をせられしかど、元より高雄の上人は難行者との聞えも高く、弟子の扱ひ荒荒しく愛目を見すること多しと、聞懼をして高雄へは弟子を進むる人なきに況して平家の人々は、鎌倉殿と文覺とは深き緣由のある中もへ、北條四郎は

●六代御前の乳母

表より之を召捕り、文覺は裏より之を探し出し、殘らず失ふ方便ならめと、益〻怖れ誰一人兒を進むる者なきは、また是非もなき次第なりけり然るに一日島雄の門前に悲しみ歎く女あり、文覺上人何事ぞと立出でられて問ひ玉ふに、女はやう〳〵涙を拂ひ、妾事は六代御前の乳母にて侍りぬ、ろも六代御前と申すのは小松三位中將維盛卿の御息にて今年十二になり玉ひしが、菖蒲谷の北の方大覺寺の裏に隱れ、母御前諸共此年比託住み玉ふに誰人の申し明せしもにてや、昨日北條時政といへる武士馳せ向ひ、召捕へて引立て往かれ柔弱き女の力及ばず、詮方なく〳〵さまよひ居たるが、聞く上人は此日頃兒を求め玉ふ由、また鎌倉殿に緣由あるよし、何卒して六代御前の御命を乞ひ受け玉ひ、御弟子ともなし玉はらば、此上もなき御慈悲ぞと、またさめ〳〵と泣き沈みぬ、文覺上人始終を打ち聽き、さては六代捕はれしとな、彼れは正し〳〵平家の嫡流、鎌倉殿も容易くは彼れが助命は免されまじ、ヨシ〳〵文

●平家の嫡流

●文覺上人時政と面談す

覺命に替へ鎌倉殿に歎願せん、併し斯くいふ其間に若しも北條首打たば最早歎いて詮なき事、我は之より時政に面談すれば汝も亦、急ぎ歸りて母御前に告げて慰め申すべしと、情けの言葉に女は悅び、伏し拜み〳〵心殘して立去りける。かくて文覺上人は急ぎ北條の旅宿に赴き、時政に面會して四方八面の噺に事よせ、平家の餘黨退治に及べば、時政眉を顰め、今度上洛致せし事全く平家一門の餘黨退治の其中にも、故中將の息六代は正しく平氏の嫡統なれば、必ず尋ね出すべしと鎌倉殿の仰せを蒙り、隨分探し求めしかど手掛りなくて是非に及ばず、今は下向と思ひしところ、昨日聞らず卑女の知らせに依りて即時に立越へ、難なく召捕り來りしが、かく申さんも武士の身に可笑き事に侍れども、比類少なき美少年空しく失ひ申し兼ね、心苦しく候といへば上人膝進ませ、さては六代御座するか、文覺も亦見申したしと、あれば此處にと引開くる障子の中に織物の直垂を着て悄然と座し玉ふをば熟〻見るに

顔色柔和にして愛々しく、猛からねどもまた威なり、雨眼涙にうるみたまへば、上人も時政も涙を袖に包むより外に言ふべき樣もなし、暫くありて文覺上人思ひ入りて云はるゝやう、此若公を見奉るに先世の因緣あるにてか、餘りに最愛く侍りぬれば、明日より二十日の間御命を失ふべからず、急ぎ鎌倉殿に見參して何卒文覺が弟子に申し請け、出家を勸め一門の菩提を弔はせ申したし、返す〳〵も廿日のところ御邊の惠み仰ぎなむと、時政聽いて流石にも哀れ彌增し實にもゞと、容易く同意したりしかば、文覺上人打ち喜び、假令佐殿いかやうに無理のたまふとも此上は、文覺が命にかへて申し受けんと勇み立ち、早々暇を告げられける。さても文覺上人は弟子相照を召具して急ぎ鎌倉に下向あり、頼朝公に對面して早速云ひ出でらるゝやう、さて此度文覺が罷越し候ひしは、弟子一人申し受けたく願ひのために候なり、外樣の弟子を從へんには別に子細は侍らねども、これは御願ひ申さずては中々叶ひが

●先世の因緣

●文覺上人六代の命を乞ふため鎌倉に下向す

たき弟子なり、斯く申すは餘の儀にあらず、小松三位中將維盛の息男六代と申す者、今年十二の童兒にて候ひぬ、此者平家の子と生れ出づれば、今生にては文覺が當の敵にて侍れども、前生の因緣ありける故にや、一目見るより敵とは存せず、いとも哀れに思ひ侍れり、さるに今北條殿召捕へて用捨なく首うたんとし侍れば、文覺が兼ての性質、いかに我儘働くとて、これ計りは願ひまつらで、迚も叶はんやうもなく、謹しみ願ひ上ぐるなりと、聽いて二位殿氣色を變へ、コハ思ひ寄らぬ事を聽くもの哉、今回北條を上洛させ、平家の子孫を探し求め、失ふべき旨申し付しも、其實六代を捕へんためなり、他の平氏の餘黨とあらば請に任せん子細もあれど、六代は平家の正統一人當千の者なりと、聞きも終らず文覺上人頻りに急き込み聲を高め、さればこゝ此文覺態々參り願ひもしつれ、無理の願ひは叶はずとは文覺も亦能く知れり六代が命を助け隱岐島或はまた鬼界が嶋へ御流し下されたしと申しなば、貴

●文覺上人頼朝公と激論す

公の御身に較べさせられ、若し文覺が如き者あり、反謀を勦め大事を起さば後悔先きに立つべからずと、御取上げもあるまじく、ろれを願ふは固より無理なり、今は之とは趣き異り、唯文覺が弟子として出家させなん其時は命あるといふまでなり、其上道心堅固にして帥の恩を忘却せず、貴公の御恩を思ひなばなどか敵する心あらんや、却て貴公の御武運の長久をころ祈らめと、存せしよりの願ひの條全く無理と申されまじと、いへども二位殿首を打ち振り、是迄上人の申せし事用ひぬことはなかりしが、此儀は容易く肯ひがたし其故は先づ第一世間の聞ゑ如何あるべき、上人の願ひとあれば敵をも助け赦すと云はゝ、恩賞も刑罰も分別なき樣成行きて、功も罪も同じとせば天下の政道立ちがたし、また第二には指當り北條の思はくあり、種々に評議を凝らせし上、平家の子孫とあるからは殘らず之を探し出し、幼少とまた成長と其差別なく之を失ひ、根を絶ち葉をば枯さんため、寒氣を厭はず上洛して、隨分

●助命の難き二個の理由

穿索遂げ難し、平家の餘類數多く失ひしかど此等をば左まで功とも思はざるべし、然るに逗留の中數ありて六代を召捕りしは其功實に抜群なるを、ろれに心の付かざる如く、上人の願に依りて容易く助命する時は、北條が功は功に立たずと、恨みを遺さんものにもあらず、猶後々に害ありなんと、許容の樣子見ゑざれば文覺上人疑と思察し、委細に仰せ聞かさせ玉ふ其上押して申さんはいかゝしく侍れども、唯此上の御願ひには何卒文覺が志を御憐察に預りたし、抑々出家の慣例として、人の命を乞ふに於ては自身の難儀を厭ふべからず、其人の命を乞ひ得て出家さすれば其分立てども、若しも命を乞ひ得ぬ時は決して其分立ちがたし、已に其分立たざるときは寺ある者は寺をひらき、雲水となり跡を隱し、二だひ知音に面をば合せぬ事に侍るなり、文覺元より萍水の身にしあなればこれにまた、知音に面會せぬことは敢て厭ふにあらねども、貴公が恵みに折角と再興成就し遂げたる高雄の寺の本尊に永く給

●出家の慣例

仕も叶はぬとは、思へば〳〵文覺がさても運の拙さよ、嗚呼是非ひなき浮世の有樣、所詮此上は旅宿へ歸り、死後の事ども相照に申し含めて文覺は旅宿に於て潔ぎよく願ひ死に相果てなむ、若しも他國を偏歷せぬ法師なりせば他國にて、名を變へ跡を隱しても死すべきものを文覺は大凡日本六十餘州歷廻りしかば今はハヤ隱れ住まんに處なし、所詮願ひ死に果てなんこそ此上の思ひ出ならめと、ツト立上り退かるれば二位殿も默然と座したるまゝに見やりたまひぬ。ナント諸君、此結局はどうなるでせうか、頼朝公も猜忌の性質にて大切ありし實弟の範頼義經の兩將さへ終に殺した程ぢやから、迚も此六代御前を助けられようとも思はれない、さればとて此文覺上人も云ひ出すからには後に引かぬこれも强情の性質ぢやから、定めし願ひ死に果てる積りで斷食位始められたに違ひない、中々面倒なことになり居つた哩。爰にまた三位中將維盛郷西國へ下向の砌り、六代御前および母御前京都に殘したまふにつ

●猜忌と强情の衝突

●齋藤五齋藤六の事

き、家臣なる齋藤五齋藤六とて兄弟の者共を招き寄せ、我れ西國へ下向の后は我にかへて妻子をば守り呉れよとのたまふに、兄弟はこれを堅く拒み、家來の習ひ何として京都に殘り侍るべき、何國までも御伴を許されたしと、ありければ維盛これを制し玉ひ、今度討手に向ふと云は、固より武士の習ひとして、汝等も御伴を願ふべきは理りなれど、今は一門運盡きて斯く落延びる心底は唯萬一を頼むばかり、さるに依て汝等は跡に殘り六代を守護して時機の至るを俟つべし、家來の身として主命に反くべき道理やある、六代とても汝等が爲めには元より主ならずや、家來として親には仕へ子には仕ふべからずと云は、相傳の主從にあらず、直に暇を遣はすべし、また相傳の家來なれども此度は主命に反き、六代を主君とは頼むまじと云ひ募らば速かに勘當すべしと、事をわけたる誡めに兄弟は深く誤り入り、段々厚き御教誡身に取て勿体なし、此上は六代御前に仕へまつりて御武運の開くを相待ち申すべと、

●主從の關係

聽いて維盛喜びたまひ、ろれ聞いて安堵したり、嬉し、〳〵賴むぞよと、涙を泛べ出で立ち玉ひぬ。斯くて後兄弟は心を合せ忠實に六代御前を守護なし居たるが、今圖らずも北條に召捕へられたまひしかば、何地迄も御伴せんと詮方なく〳〵北條の旅宿へと付添ひ來り、若し六代御前害せられなば立地に出家して菩提を弔ひ申さんと兼て覺悟はせしかども、文覺上人鎌倉殿に助命を乞はん其爲めに二十日の間北條と過ちなき樣約はれし事を一縷の賴みにて今日は上人の御知せやある、明日は六代御前の御免しやあると、母御前始め兄弟の者一日々々に明し暮し、已に二十日の日限も過ぎ去りしかど上人より何の音信絶えてなく、また鎌倉より何事も申し越さねば北條も今は殆んど途方に暮れ、ハヤ其年も暮れ間近さに覺束なくも便を待ち、都に年を越さんと如何あらんかさればとて、今更六代御前をは殺害せんも心苦しく、所詮鎌倉迄伴なひ往き其上よきに計らひなむか、また途中にて害せんかとやう〳〵

●時政鎌倉に下向と決意す

に案じ究め、齋藤五齋藤六に其條々を述べ聞かせ、明日は都を發足と定まりしかば兄弟の者北條に打ち向ひ、段々厚き御勞りを裝むりし辱けなさ、また上人の約れたる日限已に過ぎ去りしも、猶一日も御無事にて御伴ひ下さる、御芳志の程さぞやさぞ母御前も喜び玉はん、さて吾々は此上とも旅程の御供せん事は屠所の羊に異ならず、一足づゝに消え行く露の命、冥途の供奉も同じことにはありつれども、責めて鎌倉道の邊までも御供許させ玉へかしと、涙ながらに賴み入る心を北條察しやり伴ひ發足せられしかば、兄弟は馬に乘りもせず六代御前の輿に付添ひ、海邊山下驛路の重なる事も覺束なく、幾日經ちぬる事をも分ず、夢路をたどる如くにて、ハヤ東海道駿河國千本松原にと着きたりける。

●千本松原

ナント諸君、此時の主從の心情はいかゝで御座ッたらふか、思ひやるさへ中中哀れなことぢや、成るべくは此結局を御話し申したいと思ふて、六代御前

の和歌を贄題に供へたことゞやが、餘り長くなつたから愈〻田暝の滿座を以て御話しする事と致しませふ、先づ」……下座

（助命の御許狀、文覺上人再流罪）

○第拾席

強力の業の重荷をひぎかつき、なほ後の世へ肩かへて持つ」文（拙心和尚の歌）

爰に北條時政は心もとより剛勇なるも如何なる前世の宿因にや六代御前を深く憐れみ、何卒文覺上人の助命の願ひ許されしよき便をば得まほしく、一日〳〵と日を送り此處まで伴ひ來りしかど、今はハヤ是非に及ばぬ兄弟の者を招き寄せ、知らるゝ通り鎌倉もハヤ程近くなりしかば、之よりは兩人とも都へ歸り申されよと、聽て兄弟は胸とゝろき、さては此處にて若君を失ひぬるかと思ふにつけ、兼て覺悟はしつれども今更悲歎彌增して須臾言葉も出でざりしが、やう〳〵心取り直し、吾々兄弟此年月故三位殿の命を守り、斯くも附添ひ參らせて片時御側を離れしことなく、此度とても御行末見立てまつらん計りにて此處まで附添ひ參らせしが、今を限りの御主君の御命にて候かと聲を惜まず泣き沈めば北條これを慰めて、イヤこれ兄弟能く聽かれよ、今度都を立つ折柄鎌倉殿の御沙汰やわる、又は途中に失ひなんかと思ひ煩らひ此處迄は日數を重ね來りしかど、能々思ひ廻らせば鎌倉迄は具しがたし、鎌倉殿の兼ての仰せに、平家の子孫とあるからは誰れ彼れの用捨なく、召捕り次第時日を移さず早速失ひ申すべしと、幾度となき嚴命なれば所詮此儘鎌倉へ具すべき樣はなけれども、唯上人の便のみ聞かまほしくて此日頃、途中に文箱もて來る者さへあれば上人のハヤ使ひかと、思ひし程に相待ち今日まで勞りしが、二日三日の延引は得てあるべきに上人の約束の日限過ぎ、最早十日の上越すは鎌倉にての願びの節所詮叶はぬことなるべく、此上は時政が力にも及び申さず、今日は失ひ參らせなむ、必ずともに時政を恨みと思ふことなかれと、情けこもれる言葉のかず〳〵六代御前も涙を押へ、北條に是迄の勞

●鎌倉殿の殿命

りを謝したまへば、兄弟も北條に打ち向ひ、段々厚き御芳志はいかで忘却仕まつらんや、猶御最後まで見届け參らせ、御死骸をも納めし上は直に髻切拂ひ、出家を遂げて御菩提を吊ひ申し奉らんと、云へば六代これを制され、兩人は急ぎ都に還り我に代りて母君に宮仕へ致すべし、我亡くなりし其事は堅く包みて鎌倉迄無事に着きしと申すべし、いざ御文を參らせなむと認め玉へば兄弟の者、心緩もわりさく言り悲み歎き伏し轉び、喚き叫べる有樣は餘所の見る目も哀れなり。斯くて時政氣を勵まし、何時まで歎くも詮なき事、誰かある御首打て、いざ疾く〳〵とありつれども、郎等共も顏見合せ我こそ御首打ちなむといふ者なくて暫時は悄乎として物音せず、涙を忍ふばかりなりかゝる處へ向ふより黑衣を着たる一個の法師、月毛の駒に打ち跨り勢ひ込んで馳せ來る、是れなむ文覺上人の弟子相照にてありけるが、人々を見て聲をかけ、過ちあるな北條殿と云ひつゝ、頸の文筥を解き、是れ即ち二位殿の御免

●兄弟の悲歎

●助命の御許狀

文なりと、渡せば北條押し頂き、之を披きて高聲に讀み上る文に云く「小松三位中將息六代高雄上人頻ニ申請故ニ所ニ預給一也」と、御直筆に紛ひもなければ戲乎嬉しやと一同に、悲み忽ち喜びと變り果てたるろが中にも、齊藤五齊藤六が悅び譬へて言はん方なし、又六代も夢の如く思ひ玉へば取敢ず

さゐずとてたのむ命にならねども、今朝まで露の身ぞのこりける

斯くなむ口吟み玉ひける、兎角する間に文覺上人これも亦馳せ來り、先づ時政に禮を述べ、日限延引したりしかば言甲斐なき文覺と、疾くに若君失はれ玉はざるやと案じ煩ひ、安き心もあらざりしが、此体を見て安堵致せり、定めて御許狀は御覽ありけむ、さて二位殿にも此君は平家の正統なるを以て決して免す能はずと、中々御許容ましますべき御氣色は更に見ゆず、去迚文覺此儀に引退かん樣もなく、終に文覺も命を捨て願ひ死に果てなむものと、旅宿に籠り斷食を始めし程に二位殿も哀れと思召されてや、御免をころありた

るなれ、然るに御邊寛大ならず、二十日の日限過きたりとて、若しも若君失ひたまは、、假令文覺が願ひは叶ふも、最早許なき事なるべきに、今日まで勞りたまひし故、此文覺が願ひも達し、また母御前兄弟の者まで、歡喜これに過ぎ申さずと、聽いて時政打ちうなづき、實に此君の御運目出度し、若し御許狀を今半時遲く拜見するならば此時政も不覺の名を取り、歎くも詮なきことなりしが、返す〳〵も悅ばしさよ、只此上は一日も早く都に歸り母御前に御對面ころありたけれ、此時政も御名殘惜しく、御見送りを申したけれど急ぎ申す要事もあれば、此處にて御別れ申すべしと、互ひに後の無事をと祝し、西と東に袂を分ち、見返り〳〵遠ざかれり。かくて文覺上人は六代御前を引具して道を急がせたりしかど、ハヤ年暮れて尾張國にまた新たなる年を迎へ、正月五日恙がなく京都にと歸り着き、其日は二條猪熊なる上人の宿所に憩ひ、其夜密かに大覺寺へと到りたまひて鎖しぬる門をたゝけど人音せず

●東西に分袂す

コハ不審と齋藤五齋藤六も兼てより案内知りたる築地を越へ、門を開きいざとばかり内に迎へて見渡すに、近き程は人の氣の住ひし樣子あらざれば六代御前歎きたまひ、今まで命惜しかりつるも、母君に一度は見ゑまつらん計りなりしがさては失せさせたまひぬるよな、此上は生きなんも何とて甲斐のあるべきやと、せき來る涙拭ひもあへず託ちたまへば人々も、實に道理と貴ひ泣きするより外に詮方なく、其夜を明し朝まだき近き邊の人々に尋ねたまへは知る人あり、年の内は大佛に詣でられしが正月は長谷寺に御籠り遊ばす由に承はりぬと、聞いてはなか〳〵猶豫もならず、齋藤六を長谷寺へ急がせやりて此由を告ぐれば母君心もろう、取るものさへも取りあへず急ぎ登りて大覺寺へと還りたまふて盡きせぬ因緣、母息御無事の對面に夢ならば覺めざらまじと、喜びたまふも理りなり、さて母御前は若君に早々出家し玉へと、勸めたまへど文覺上人之を制して云はるゝやう、別れたまひし其時の御姿にて

●母子の對面

今一度逢せ參らすろのために斯くは計らひ申したり、之より高雄へ御供致し御出家の儀は其上にてもるゝ計らひ申すべしと、聽て高雄に伴ひて歸られしかど出家の儀は急に遂げさられもせず、物など習はせ居たまふ中實に光陰に關守なく、いつか三年を過ぎ行きて十五歳にとなりたまへり、然るに鎌倉殿よりは事の便のある毎に、預け置きたる小松三位中將の息六代は如何せしぞや器量の程いかゝあるぞと尋ねたまへば、文覺上人よさ程に答へらるれど疑ひの兎角晴れねば、今はハヤ、猶據もならず十六の春を迎へて六代御前剃髮あれば齊藤五齊藤六も遲れじと同じく髻切り拂ひ、主從ともに出家を遂げ、佛道修行の身となりける。ヤレ〳〵六代御前の命も風前の燈火と思はれしがどうやらこうやらつなぎとめた、定めし諸君も御氣遣ひ下されたらふが、斯く打ち揃ふて出家を遂ぐるといふに至りしは、いかにも目出度事て御座る、併し此等の事は贊題に供へた和歌の通り、皆原因結果の然らしむる所

●六代御前及ひ兄弟の出家

と云はねばならぬ、文覺上人程の聖僧でも造罪招苦の道理は動かすことは出來ぬから、此上とも如何成り行くものにや預言することも出來ぬ、況して六代御前も天命を全ふし得らるゝや否やは之より直に御話し申せば分ることぢや、寶に光陰は流水に均しく須臾だも止まることなければ、春と暮れ秋と過ぎ去りていつかしか二十年あまりを夢の間と經ぬる程に、建久十年春正月光る源氏の御大將六十餘州の總追捕使頼朝公も定業にや五十三歳を一期とし敢なく薨じ玉ひしかば、其威に怖れ今迄は兎角の事も云はざりし文覺上人の評判とり〳〵、近き頃は二ノ宮の皇子に語らひ表をば學問と見せかけて、ろの裏は畏くも主上を廢し二ノ宮を位につけん計畧、さて恐ろしき法師よと、跡方もなき讒言にも尾に尾がつける一犬の虛に吠ゑ萬犬實と傳へ、終に二條猪熊なる文覺上人の宿所へと官人數多馳せ向ひ、八十にあまる上人を情け用捨もあらぬ〳〵しく搦め取りて引立て行き、隱岐國へと流したり、されば上人京

●頼朝公の薨去

●文覺上人再度の流罪

都をば出でぬる時に云はるゝやう、嘘是れほどに老の波立ち、今日明日をさへ知れぬ身を、いかに勅勘なればとて、都近くに置きもせず、隱岐の島へ遠流とは、さても〳〵恨めしき事どもなりと、歎かるゝ心の中ころ哀れなれ、またろれのみか上人の願ひに依りて命を助かりし六代御前出家して今は三位禪師とて、三十餘歳になりたまへるを、さる者の子なりさる者の弟子なりけりと鎌倉より、公家に願ひて高雄なる山の奥より探し出し、終に相摸國へと引かれ斬られたまふは殊更に哀れなりける次第なり、さはさりながらこれもみな贅題の和歌の通り、強力の業の重荷をひきかつぎ、なほ後の世へ肩かへ持つ、世の有樣ころ面白かりけれ。さて諸君、やう〳〵と今晩で滿座となりました、御緣があらばまたの法座で、まづ」……下座

●三位禪の斬首

連夜説教　文覺上人　尾

文覺上人與附

明治廿八年十一月八日印刷
仝　年十一月廿日發行

愛知縣名古屋市門前町十七番戸　發行者　三浦無助
同縣同市伏見町三十三番戸愛都社　印刷者　竹島要左衛門
同縣同　市門前町二丁目　發行所　其中堂書店
京都三條通高倉東入　大賣捌所　出雲寺文次郎
東京日本橋區鐵砲町　仝　出雲寺萬二郎
同　麻布區飯倉町五丁目　仝　森江佐七

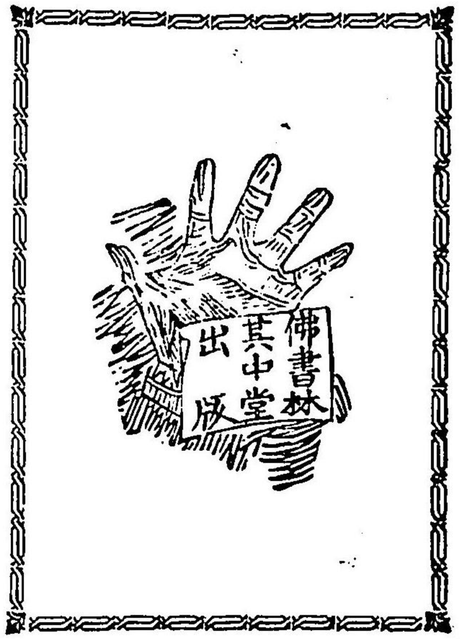
版權所有

●連夜說教出版の廣告

此の連夜說教と題しました書物は、どれも〳〵佛教に因緣の深き人達の一代記で、一冊の本にて十席づゝの說教の出來るよう、贊題から時候の挨拶まで、のこらずに、順序たしく書きてあります、夫れのみならず、冠註には故事出據の出所、又は時代の遠近、或は辨者の注意等をも深切に載せたれは、一讀せはどんな方にても、面白き、評判のよき、幾日にても聽衆のへらぬ、參詣人のふえる、御說教か出來まする、尤も此の連夜物も一冊毎に著者が違ふて居りますから、悲ひ物や、又は武張た物や、みな夫々にかわつては居りますが、つまり一部の構造はどれも〳〵も一冊十席て讀切りに成て居りまする また追てあとからも出版になりますか今の處で出版になりましたは

●松崎大尉　安城渡にて討死の因緣
●鐘崎三郎　金州城外の露と消ゆる因緣
●中將姫　邁の曼陀羅の因緣
●熊谷直實　蓮生發心、敦盛の因緣
●梅若丸　隅田川木母寺の因緣
●三莊太夫　由良の湊千軒長者の因緣
●きよ姫　鐘卷道成寺の因緣
●彌陀次郎　淀一口長者の因緣
●石童丸　苅屋物語、高野山の因緣
●本多善光　善光寺建立、繁昌の因緣

右は何れも一冊が十二錢郵稅は四錢であります、又それにても六冊一纏めに御注文になりますれば郵稅共に七十五錢であります


佛書林
其中堂
出版